



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	論文編. 札幌農学校建学の理念—W・S・クラークの教育思想とその実践を中心に—
Author(s)	小枝, 弘和
Citation	北大百二十五年史, 論文・資料編, 1-53
Issue Date	2003-02-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29999
Type	departmental bulletin paper
File Information	ronbun_p1-53.pdf



論
文
編

札幌農学校建学の理念——W・S・クラークの教育思想とその実践を中心に——

小 枝 弘 和

はじめに 問題意識と課題

これまで北海道大学は「開拓者精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」、「実学の重視」という理念を培ってきた。北海道大学の中村睦男総長はこれらの教育理念を総括し、「絶えず進化するそれぞれの時代の課題を引き受け、新しい道を切り開くこと、閉鎖的な思考を脱却して、広い視野と高い見識を求めること、そして豊かな人間性と高い知性を涵養しながら、高度な専門的知識を習得すること」と述べている⁽¹⁾。

これらの理念は周知の如く一八七六（明治九）年設立の札幌農学校から受け継がれてきたものである。とりわけ同校の草創期に尽力したW・S・クラーク（William Smith Clark, 一八二六～八六年）の教育思想に影響を受けること大である。しかし明治初期同校は開拓使仮学校の専門学科として構想されていた。その構想を見れば現在まで引き継がれている理念は窺われない。あくまで一八七二（明治五）年頒布の学制一九〇章に規定されたように、構

想段階の同校は「外国人教師ニテ教授スル高尚ナル学校」⁽²⁾であり、「長技ヲ取ル」⁽³⁾ことを重視し、「神教、修身等ノ学科ハ今之ヲ取ラス」⁽⁴⁾であった。ここに開拓使とクラークの教育理念の相違点と合致点、そして両者間の関係を分析する必要がある。

これまでクラークが札幌農学校にもたらした教育思想、そして彼が同校で行った教育実践に関して高倉新一郎氏、秋月俊幸氏、大山綱夫氏等により数多くの先行研究がなされてきた。フロンティア精神、全人教育(liberal education)、キリスト教がクラークのもたらした主たるものであるといえよう。しかしこれらの先行研究は彼が実践した八カ月間を枠組みとした考察である。大山氏が「思想的に、つまり当時のアメリカ文化の枠組みの中でクラークを考察する仕事は残されており、この作業を通してクラークの歴史的 position はより良く解明される」⁽⁵⁾と述べているように、クラークの思想形成過程とその実践を総合的に捉えた上で同校での彼の教育実践を捉える必要がある。彼の思想形成に関しては逢坂信彦氏と John M. Maki 氏による先行研究がある。しかし前者は礼賛的伝記的、後者は政治的行政的学問的視点から主にクラークを考察したものである。よってクラークの思想形成過程とその実践から彼の教育思想を捉え直す必要性が増大する。

以上の問題意識から本論文では札幌農学校の建学の理念の分析を試みる。その際まず同校の設立過程を押さえる中で、開拓使が構想した同校の設立の理念の概要を見出す。次に開拓使の構想に対するクラークの思想的影響を指摘した後に、その影響を明確にするため彼が五〇年に及び形成してきた教育思想を分析する。そして以上の考察を踏まえて、同校におけるクラークの教育実践から彼が目指した人間像を明らかにする。最後に以上の考察を踏まえた上で、同校設立の理念を明確にしたい。

一 札幌農学校の設立過程

本章では開拓使と札幌農学校の関係を考察し、開拓使の開拓政策における同校の位置付けを行う。併せて同校とクラークの関係から同校に対する彼の影響を考察する。そしてそれらを踏まえた上で札幌農学校建学の理念の概要を明らかにする。

一—— 開拓使と札幌農学校の関係—— 黒田清隆の教育観を中心に——

(一) 開拓使の設置とその方針

箱館戦争終了直後の一八六九年六月（明治二年五月——以下、明治五年までの（ ）内の年月日は陰暦を示す）、明治新政府は「蝦夷地開拓ノ儀」を全国に下問した。この内容は「皇国ノ北門」⁽⁶⁾である蝦夷地が「官吏之土人ヲ使役スル甚過酷ヲ極メ外国人ハ頗ル愛恤ヲ施シ候ヨリ土人往々我邦人ヲ怨離シ彼ヲ尊信スルニ至ル」⁽⁷⁾現状を問題視し、「開拓教導等之方法ヲ施設シ人民繁殖ノ域トナサシメラルベキ」⁽⁸⁾とするものであった。ここに蝦夷地へのロシアの南下とアイヌ人の反乱に対する政府の危機意識を読み取ることができる。これらの脅威に対する早期の対策として、政府は箱館戦争の僅か二カ月後の一八六九年八月蝦夷地を北海道と改称し、開拓使を設置した。

開拓使が具体的にとるべき方針は一八六九年十月七日（明治二年九月三日）右大臣三条実美の開拓使宛の達書に見られる。三条は達書の中で北海道に「聖旨ヲ奉体シ撫育之道ヲ尽シ教化ヲ広メ風俗ヲ敦スヘキ事」⁽⁹⁾を開拓使に要請している。また彼はアイヌ人との調和を重んじた開拓政策の展開を求め、さらに雑居地である樺太に対しては、ロシアとの摩擦を回避し礼節を重んじ条理を尽くすよう命じた。⁽¹¹⁾このように開拓使はロシアとアイヌ人との調和を図りながら、設置当初明治新政府の天皇中心の国家体制を北海道にも浸透させ、開拓政策を展開する軍事的政治的

役割を担うこととなる。この後一八七〇年三月（明治三年二月）樺太開拓使が設置され、箱館戦争で名声を博した黒田清隆（一八四〇～一九〇〇年）が開拓次官に就いた。⁽¹³⁾

一八七〇年六月（明治三年五月）開拓使は「開拓使見込大略」として具体的な開拓政策の順序を太政官に上申した。まず開拓使は当面展開する開拓政策として、「海漕を利し以て人民尔便し且諸物品の有無を通すべき事」、「人民を移し開拓の基を立へべき事」、「移住人洪恒産を制し与へ専ら開墾を勉め農業を勧むべき事」、「漁場を増開て海产遺利無之様致スへき事」、「地宜を相て生産を阜尔すべき事」、「金銀礦を開て貨源を広むべき事」を挙げている。⁽¹⁴⁾また将来的展望として「内地同様府県の制を定むべき事」、「海陸軍を置て防備を厚くすべき事」、「大小学校を興シテ大ニ皇化布施すべき事」を挙げている。⁽¹⁵⁾ここには豊富な海産物を活かした殖産興業政策、内地人移住による開墾政策、鉱山等の実地調査を中心とした生活の基盤を確立する経済的な政策を第一とし、次に軍事的政治的行政的整備を成すべきとする開拓使の方針が見て取れる。この開拓使と政府の方針を比較すれば政策の重点に相違があるが、内地と北海道の実態の相違を体感した開拓使と中央から指令を行う明治政府の官僚との間の相違であるといえよう。

（二）黒田の開拓政策と教育観

以降北海道では開拓使の方針が展開されていく。その中心人物となったのが黒田清隆であった。彼は一八七〇年三月（明治三年二月）樺太開拓使次官に任命されると同年八月（明治三年七月）樺太へ渡った。そして彼は同年十一月（明治三年十月）帰京後「十月の建議」を奉じた。⁽¹⁶⁾この建議で彼は三年しか見込みのない樺太に拘らず、北海道の内政を重点的に行うことを進言した。さらに彼は内政の充実を図るため「風土適當ノ國ヨリ開拓ニ長ズル者ヲ雇」い、その人物主導で開拓政策を展開させて行くことを主張している。⁽¹⁷⁾これは、彼が「内政齊理セザレバ基礎定マラズ基礎定マラザレバ禍蕭牆ノ内ニ伏」⁽¹⁸⁾し、北海道の開拓だけでなくロシアの南下やアイヌ人の反乱に対処する

ことも不可能と考えていたからであった。そして黒田は一八七〇年十二月（明治三年十一月）三条実美より「外人雇入」と「實地検分」を目的とする洋行の命を受けた。⁽¹⁹⁾翌年二月（明治四年一月）黒田は米欧を訪問し、アメリカの農商務省長官ホレース・ケブロン（Horace Capron, 一八〇四～八五年）の招聘に成功して同年七月（明治四年六月）帰国した。⁽²⁰⁾そして同年九月（明治四年八月）に北海道樺太両開拓使が統合されると黒田は開拓次官となり、長官不在のなか彼が実質的な長官としてケブロンと共に北海道を中心に彼の開拓方針を展開していく。

以降、黒田は様々な開拓政策を展開するなかで、とりわけ教育政策を重要なものと位置付けていた。まず彼は開拓次官就任直後の一八七〇年十一月（明治四年十月）正院へ女子留学生派遣の伺いを提出した。その中で彼は欧米諸国では「人民挙テ国ヲ愛スルノ念慮ニ有之」ることに着目し、その愛国の念を抱かせるのは教育であり、教育を可能ならしめるのは家庭の母親であり、家庭の母親への教育とその母親がもたらす子弟への教育が北海道開拓の基礎を築き、真なるものにならしめると述べている。故に彼は女子教育なくば「北海道ノ儀ハ今般更ニ創業ニテ毫髪ノ差ヨリ尺寸ノ誤リヲ生シ候ハ必然ノ事故一日モ因循難相成候」という見解から、欧米諸国への女子留学生派遣を主張した。彼の女子教育の視点は封建体制崩壊直後にあって非常に開明的な視点である。また彼が欧米諸国の近代化の主要因を教育に見出し、北海道にそれを導入し開拓政策をスムーズに展開させようとしたことは、当時開明的であった薩摩藩で青少年期を過ごし、また薩英戦争を経験し、欧米文明への柔軟な姿勢を形成してきた彼の見識の高さを示すものである。さらに彼自身が欧米諸国の近代化の根本的要因となる思想的背景を理解していたことを窺わせるものである。

次に黒田が期したものは開拓使仮学校の設置であった。同校は「北海道開拓之為メニ」「彼地ノ首府タル薩摩二建テ彼地ニ住スル者ヲシテ専ラ智識ヲ増シ才芸ヲ進メ」⁽²³⁾ることを本旨とし、「生徒生業之上ハ官費ヲ以テ修業セシ者八十年ノ間私費ヲ以テ修業セシ者八五年ノ間誓テ北海道開拓ニ従事」すべきことを条件としている。⁽²⁴⁾しかし「礦

学器械学農学等ハ文部省ニ於テ中学課ニ列シ候儀ニ付小学ノ名称ヲ相止メ仮学校ト称⁽²⁵⁾べきとの正院の命により、同校は開拓に必要な諸学科の基礎を広く指導する機関に留まった。さらに仮学校には厳しい規則が設けられていた。「仮学校内則」⁽²⁶⁾には生活全般に関する規則が詳細に記されている。この規則は学生の道徳心を自発的に喚起するものではなく、極めて受動的な生活上の規制であった。すなわち同校は学生の内発的な道徳心を陶冶しない、あくまで専門的知識及び技術の基礎を習得する場であった。

開拓使仮学校は一八七二年五月（明治五年四月）東京芝増上寺で開校された。しかしまもなく一つの問題に直面することとなる。同年八月「学制」が頒布されると受益者負担の原則により官費生が廃止された。これに対し黒田は正院へ上申書を提出している。彼は「生徒ノ給費ハ財本ヲ貸与シタルト同一ナリ」⁽²⁷⁾と訴えた。そして彼は「近今西洋各国ニライテモ官費教育少シトセズ」として、アメリカのモリル法やフランスの貧民への実業的な救済措置を例に挙げ、政府に「百事御委任ノ州郡故他ニ關係障礙スルコト有ル可カラズ」⁽²⁸⁾と要請し、「他年開拓成功ノ順序ニ因テハ一軌ノ学制ニ則リ学区ノ設ケ生徒ノ撰モ一層盛大ニ興起スベシ」⁽²⁹⁾との説明を加えた。これに対して正院は翌月「規則上ニ於テハ文部省生徒規則ニ不戾」⁽³⁰⁾との見解を出し、以降開拓使直轄の学校では官費生制度が存続することとなる。

以上の黒田の代表的な教育政策には彼独自の教育観と開拓方針が垣間見られる。明治政府の開拓方針は北海道の軍事的政治的整備及び天皇中心の国家体制を浸透させる、上からの近代化であった。一方黒田は開拓使中心の政策展開と北海道住民による経済的基盤の確立の両方を重視していた。彼が官費生廃止に対して「米国ハ土地広ク人口少キヲ以テ拓地勸農ヲ公会決議シテ今ヲ距ル十年前各州ニ農学校ヲ建テ若干ノ土地ヲ附与シ生徒教育ノ費用ニ供セリ又黒奴ヲシテ入学セシメ国人ト同ク成業ノ後議員ニ列シタルモノアリ」「仏国第一世拿破侖人智ノ開ケス国益ノ興ラザルヲ憂ヘ大ニ諸術課ノ学校ヲ巴里ニ設ケ貧者ニハ其資ヲ給シテ入学セシメ芸術ヲ勸メシニ遂ニ無全ノ大功ヲ

奏シ千古ノ美談トナレリ⁽³¹⁾」と諸外国の例を挙げて「是皆文明至治之国ト雖トモ尚コノ挙アリ況ヤ開拓創業ノ国ニヲイテ西洋各国ト霄壤ナルハ論ヲ待タズ⁽³²⁾」と政府を説得しているように、彼は欧米諸国の諸例より下からの近代化を見出していた。また彼が近代化の要因である愛国心を育む家庭の母親となる女子教育を重視したことにも同様のことが窺える。よって彼が開拓使のトップダウンの殖民政策、殖産興業振興政策、土地開拓政策と共に、北海道に住む人民の教育によるボトムアップの近代化を目指し、総合的な調和の取れた近代化を推進しようとしていたといえる。しかしこの段階で専門知識を兼ね備えた開拓指導者育成の具体的な彼の政策はほばない。かかる専門家の育成機関は札幌農学校が構想されるまで待たねばならなかった。

(三) 札幌農学校の設立過程

札幌農学校設立の最初の構想は一八七三（明治六）年三月黒田とケプロンとの会談中に見られる。その時黒田は「全道ノ人民食料等他方ノ資ヲ仰カス全ク其土産ノ物ヲ以テ生計ヲ成シ得ルノ目的ヲ立ルハ農業ヲ盛ニスルヲ第一之急務⁽³³⁾」であるため、「先ツ農学校ヲ興シ其方法ヲ拡充セントス⁽³⁴⁾」との意向をケプロンに伝え、同時に農学の知識を備えた実践経験の豊富な人材の推薦を依頼している。そしてこの会談の約一カ月後開拓使仮学校則例中にて二年後に専門学科を設立する構想が明記された。ここに初めて札幌農学校の設立構想が文章化される。そしてより具体的な専門学科構想が約二年後の一八七四（明治七）年十一月開拓使仮学校校長調所広丈から黒田へ提出された。この専門学科構想は、果樹園や農場を「農学の重要な全ての分野が教授される施設⁽³⁷⁾」と位置付け、「実験室が十分に備えつけられ、認められた専門的な能力を持つ教授があてがわれるべき⁽³⁸⁾」というケプロンの農学校構想に依拠して三名程度の「専門科教師御雇入⁽³⁹⁾」れを提案したものであった。これに対し黒田が「費額並規則教師雇入等精細調査⁽⁴⁰⁾」を命令したことでこの構想が現実化する。黒田の認可が下りてから調所は開拓使仮学校職員の森源蔵、井川洌、マ

サチューセツツ農科大学 (Massachusetts Agricultural College——以下、M A C と略す) 出身の内藤誠太郎、湯地定基に調査を命じた。⁽⁴¹⁾一八七五 (明治八) 年二月調所は「諸規則等ハ仮学校従前ノ規例」を踏襲し、⁽⁴²⁾『マサチュセツ州』農校ノ課目」を取捨選択して採用し、教師三名の雇入れを要請する報告書を黒田に提出した。この報告書を受けて黒田は太政官に「教授ノ為米国人三名兼務ノ都合ニヨリ四名」雇入れの伺いを提出し、⁽⁴⁵⁾同年五月に太政官の裁可を受けると、同年八月駐米全權公使吉田清成に「其国農学有名家之内ヨリ教頭ヲ兼ネシムヘキモノ一名」⁽⁴⁷⁾を選出し、「他ノ二名ハ右教授ヘ御示談之上可然御取計」⁽⁴⁸⁾うように依頼した。この要請を受けて吉田はアメリカの教育界で活躍していた、親日家であり日本人留学生の世話をしていたノースロップ (Birdsey Grant Northrop, 一八一七—九八年) に相応しい人物の推薦を依頼した。⁽⁴⁹⁾ノースロップは一八七五年十一月三日にクラークと会い、札幌行きを勧めた。⁽⁵⁰⁾その時ノースロップはクラークに開拓使希望の二年間の契約期間を提言するが、当時 M A C は深刻な財政難で彼が学長職を長期間不在にすることは不可能であったため、クラークは「予カ日本ニ在リテ施スヘキ事ノ肝要ナルモノハ一ケ年ニテ殆ト二ケ年分ノコトハ成シ得ベクト致愚考候」⁽⁵¹⁾として契約期間一年を要求した。そして吉田と開拓使の間でクラークの雇用に関して幾度かやり取りが交わされた後、⁽⁵²⁾クラークを「著名ノ博士ニ付後來之裨益ヲ相考候得者前条僅カノ不便ヲ以相断候モ甚可惜事ト存候」⁽⁵³⁾として推薦した吉田の意見が採用され、開拓使はクラークの招聘を決定した。⁽⁵⁴⁾一八七六 (明治九) 年三月三日吉田はクラークと雇用期間一年間、「教頭 (即副校長) 及農業化学数学普通英語博士」⁽⁵⁵⁾とする雇用契約を結んだ。また残り二名は M A C 卒業生ホイーラー (William Wheeler) とベンハロー (David Pearce Penhallow) がクラークに選ばれた。⁽⁵⁶⁾彼等は一八七六 (明治九) 年七月三十一日札幌に到着し、⁽⁵⁷⁾同年八月十四日札幌農学校の開校式を迎えることとなった。⁽⁵⁸⁾

以上の考察を踏まえれば、開拓使による札幌農学校の建学の理念とは北海道の開拓政策の基本となる農業政策を知識面及び技術面から指導する専門家の育成であり、北海道の総合的な近代化の担い手の育成である。しかし同校

では開拓使仮学校の受動的な規則を踏襲することが決定されており、人間の内面の育成に関する開拓使の言及はない。よって同校の建学の理念を明確にするためには草創期の同校の実質的な学長であったクラークの教育理念を考察する必要がある。この考察は次節に譲る。

一―二 クラークと草創期札幌農学校建学の理念 ――カリキュラムを中心に――

クラークの教育理念は開拓使の構想とは異なる理念を持つものである。それは彼が作成したカリキュラムと開拓使が構想した二つのカリキュラム案に明確に見て取れる（巻末資料1）。

三つのカリキュラムに共通して見出される教育理念は、農業を多面的に捉え、理論と実践を統一し、強靱な肉体と戦術や統率能力を有し北辺の守りに従事する指導者の育成である。一方最も顕著な相違は語学、雄弁術、討論、演説といったアメリカの liberal arts college の全人教育関連科目がクラークによって札幌農学校に導入されている点である。彼が札幌農学校開校式の演説で「我々は模範と教授によって、我々の学生となる少年の中に、人生に役立つことに彼等を最も相応しくする精神的・情動的な資質の陶冶に努めるつもりである」と述べ、学生に「健康を保ち、情欲を抑制し、従順と勤勉の習慣を養い、そして君達が学ぶことになる諸科学に関する限りの知識を獲得し、それに精通しなさい」と要求しているように、彼は学生を専門知識を備えた指導者に育成すると共に、彼自らが模範となり、また学生自身に自律を促すことにより、学生の心中に道徳規範を形成しようとした。すなわちクラークが札幌農学校で目指したものは知・徳・体が調和的に発展した円満な人格と教養を備えた、北辺の守備と開拓の指導者たる人物を育成することであったといえる。この彼の教育理念が導入されたことで、同校は優れた人材を育成する機関としての性格を有し、明治初期の高等教育機関のなかでも異彩を放つ高等教育機関となった。

以上を踏まえれば札幌農学校の建学の理念とは北の重要地である北海道の経済的政治的軍事的指導者の育成と共

にこれらの指導者の人格形成であつたといえる。しかしクラークが目指した人格形成の詳細を考察しなければ同校の建学の理念が明確になつたとは言ひ難い。よつて以下では彼の思想形成過程を踏まえ、彼が同校に導入した教育思想に関する考察を行う。

二 クラークの思想形成過程及びその実践

本章では札幌農学校建学の理念に深く影響を与えたクラークの教育思想を明らかにするために、彼の思想形成とその実践を考察する。

二― クラークの思想形成

(一) ニューイングランドの思想

クラークが幼少年期及び青年期を過ごしたマサチューセッツ州は一六二〇年メイフラワー号でやって来たピューリタン精神の中心地である。

クラークの思想形成期である一九世紀中頃のニューイングランドには二つの大きな思想、すなわちピューリタニズムとデモクラシーが車の両輪の如く調和を保っていた。まずピューリタニズムは聖書に絶対的權威を認め、聖書を通じて自らの罪を自覚し、同時に救いを確信しながら、聖書に自らの生活規範を見出して聖書に忠実な生活を極めて禁欲的に実践することを重視するものであり、彼の時代にはまだその影響力を保持していた。一方デモクラシーはアメリカ独立の際には独立宣言の根本理念となり、またアメリカの近代化の推進力となつた。これらは共通して

人間人格の尊厳、良心、平等、自主独立、自治の概念を持っており、会衆派教会 (Congregational Church) を中心に展開された。会衆派教会とは教会の自治独立を重視し、聖書に絶対の權威を認め、聖書を生活規範とし、内面的信仰を重んじる教会であり、ニューイングランドの思想的影響の中心であった。このような背景を踏まえた上で以下でクラークの思想形成過程を通じて彼の教育思想を考察する。

(二) 幼少年期の影響

クラークはアサートン・クラーク (Atherton Clark, 一七八九—一八六六年) とハリエット・スミス (Harriet Smith, 一八〇〇—七一年) の間に一八二六年七月三十一日マサチューセッツ州の西部に位置するアッシュフィールド (Ashfield) で生をうけた。⁽⁶¹⁾ クラークの父アサートンはアッシュフィールドで医業を営み、⁽⁶²⁾ また同地のサンダーソン・アカデミー (Sanderson Academy) の理事を務めるなど同地では名の通った人物であり、クラークは金銭的に不自由のない家庭に育ったと考えられる。また彼の家庭は会衆派教会の影響を強く受けていた。彼は一八二六年十月二十二日同地の会衆派教会で幼児洗礼を受けており、⁽⁶⁴⁾ アサートンと前妻クラリンダ (Clarinda Sears) の間に生まれた子ども全員がクラークと同じ教会で幼児洗礼を受けている。⁽⁶⁵⁾ さらにクラークの妹であるハリエット・エリザ (Harriet Eliza) もまた同じ教会で幼児洗礼を受けている。⁽⁶⁶⁾ 加えてアサートンはアッシュフィールド禁酒協会 (Ashfield Temperance Society) に所属していた。⁽⁶⁷⁾ 同協会は一九世紀前半飲酒が不道德と無秩序を招く恐れがあり、聖書の精神に反し、神に見離され、植民地建設が失敗するとされて各州で禁酒運動が会衆派教会を中心に展開された当時の社会背景⁽⁶⁸⁾ を受けて、「蒸留酒の利用は、健康な人にとって不必要だけではなく有害であり、飲酒の習慣や欲望を作り出す原因であり、その利用が続く限りは飲酒の害は決して取り除かれない」として禁酒運動を展開したアメリカ禁酒協会 (American Temperance Society) の下部組織であった。⁽⁷⁰⁾ 以上を踏まえばクラークが幼少年期に会衆

派教会の影響を強く受けた家庭で育ち、ピューリタニズムとデモクラシーの影響を受けながら彼の思想基盤を形成したことが考えられる。

(三) ウィリントン・セミナリーに入学

クラークは幼少年期をアッシュフィールドで過ごし、彼の一家はイーストハンプトン (Easthampton) に移り住んだ。そこで彼らはサミュエル・ウィリントン (Samuel Williston) の隣人となる。そしてアサートンがウィリントン家の家庭医となると、両家は親しい関係を築いた。このウィリントンは厳格なカルヴィニストと称された人物で、一八四一年から七四年までアマースト大学の理事を務めている。また彼は一八四一年イーストハンプトンにウィリントン・セミナリー (Williston Seminary) を設立した。クラークはこのセミナリーの古典学科第一期生として一八四一年に入学している。⁽⁷⁶⁾

このセミナリーは一八四一年十二月二日開講の古典学科と英語学科を設置した中等教育機関であり、「教育の真の目的は真の教養を通じての人間の精神の発展である」とし、ラテン語、ギリシア語を含めた古典語教育に力を入れていた。⁽⁷⁹⁾ またクラークが所属した古典学科は「若者が全ての準備段階の学問、特にラテン語、ギリシア語の正確な学識の諸原理を徹底的に教え込まれ、同時に学問だけでなく、思想、感情、行動における全ての習慣において正しく陶冶されること」を目的としていた。⁽⁸⁰⁾ この学科ではキケロ (Marcus Tullius Cicero, 前106―前43年) の演説の実演やホメロス (Homer, 前8世紀頃) のイーリアスやオデュッセイアを教科書として古典語の指導が行われた。⁽⁸¹⁾ また履修要項をみると、古典語に加えて代数、幾何学、求積法、三角法、自然哲学、道德哲学、知的哲学 (intellectual philosophy)、修辞学、天文学、植物学、生理学、簿記、英作文、雄弁術といった liberal arts college の全人教育関連の科目が設けられている。⁽⁸²⁾ さらにこのセミナリーでは「諸言語と諸科学を徹底的に教授するだけで

なく、忠実な道徳的、宗教的指導」も重視され、生徒は安息日に礼拝を求められ、教師から宗教指導を受けた。⁽⁸³⁾以上をふまえればクラークは少年期このセミナリーで全人教育の基礎を構築したと考えられる。

(四) アマースト大学からの思想的影響

クラークは一八四四年ウイリントン・セミナリーを卒業し、同年アマースト大学 (Amherst College) に入学した。この大学は一八世紀に始まる大覚醒 (Great Awakening) 運動を背景に設立された liberal arts college の一つであり、ユニテリアン化したハーヴァード大学に対して会衆派教会と密接な関係を持つピューリタンの信仰を堅持する高等教育機関として一八二一年に創立された。

クラークはこの大学の学生生活から学問上人格形成上多くの恩恵を得た。彼が「誰もが見つけることができない、そして他人にかなりの利益をもたらすにもかかわらずまだ知られていない知識を新しく見つけ出し、記憶力と判断力的大幅な進歩に必要な精神的陶冶を行い、大学での生活を正しく送るために必要な規則正しい習慣を作り」、⁽⁸⁴⁾「最も長く続く友情を築き、心の中の最も優しい感情が常に呼び起こされ」⁽⁸⁵⁾たと述べていることから窺える。また彼はアマースト大学から強烈な全人教育を受けた。この大学の履修要項をみると、彼は四年間を通じてホメロスのイリアス、オデュッセイア、キケロの演説法や雄弁術、クセノフォン (Xenophon, 前四二七?～前三五四年) の言行録、ギリシアやローマの故事、古典文学の歴史、ラテン語、ギリシア語等を学んでいる。⁽⁸⁶⁾彼が「ホラティウスの詩論に没頭し」⁽⁸⁷⁾たり、「古きデモステネスがまるで一人の人間の心のように大衆の心を動かすために使った」⁽⁸⁸⁾「雄弁で美しい言葉を練習」したと述べているように、彼は全人教育関連科目からギリシアやローマ人の良く生きるための智慧と、彼等が理想とした精神も身体も健康で美しく、調和のとれた人間像を学んだ。またクラークは修辭学や演説法、雄弁術、討論等を通じて、古典から得た教養を如何なく表現する術を身に付けた。そして彼は文芸協会 (Lit-

crary Society) で討論や演説を行い、その能力に磨きをかけた。この協会は当時学生が大学の正課の授業以上に書⁽⁸⁹⁾法、雄弁術、討論を学ぶ一層有益な場とされ、⁽⁹⁰⁾また学生が「良き市民」(a good citizen) となるための宗教指導を行⁽⁹¹⁾う道徳的陶冶には不可欠な場と考えられていた。さらにクラークは一日二時間体育館で運動を行⁽⁹²⁾い、またヒッチコック学長 (Edward Hitchcock, 一七九三―一八六四年、学長在任一八四五―五四年) の指導のもとと大学士官候補生 (College Cadets) と呼ばれた軍事団体 (military company) で戦術やフェンシングを学び、⁽⁹³⁾肉体の鍛錬も行った。このようにクラークはギリシア人やローマ人が理想とした人間像に範を採るヨーロッパ・ルネサンス期の人文主義教育の流れを受けた全人教育をもとに、知・徳・体が調和的に発展した教養をもつ人間を育成するアマースト大学で人格及び思想の基盤を形成した。

他にアマースト大学の教授たちもクラークに人格的学問的影響を与えた。なかでも彼と関わりが深いのはヒッチコック学長、シェパード (Charles Upham Shepard, 一八〇四―八六年) 教授、アダムス (Charles Baker Adams, 一八一四―五三年) 教授であった。彼らがクラークに授けたものは自然界の全てを神が創りたもうたという自然神学的立場に立つて造化の妙理を学生に悟らせる学問観であった。ヒッチコック学長は宗教と科学を統一的に捉え、「私が教える科学によって、自然神学を示す」⁽⁹⁴⁾として学生を指導した。またアダムス教授は「天地創造に関する、特に有機的存在に関する榮譽に満ちた計画を見せることに僅かでも貢献する」⁽⁹⁵⁾ために標本陳列ケース (cabinet) を寄贈し、標本を通じて学生に造化の妙理を理解させようとした。クラークがこのような彼らの指導が「私の好奇心を激しい途切れることの無い情熱へと進ま」⁽⁹⁶⁾せたと述べているように、彼は教授たちと同じ学問観を形成した。さらに彼はアマースト近辺の山で鉱物及び植物の標本を採集し、⁽⁹⁷⁾神が造り出したものに対して畏敬の念を抱き、徐々に自然科学への造詣を深め、造化の妙理を悟っていった。

加えてクラークはとりわけヒッチコック学長より人格的道徳的影響を強く受けたと考えられる。ヒッチコック学

長はアマースト大学の禁酒協会である Antivenenian Society に設立当初より関わっていた。⁽⁹⁸⁾ この協会の名前にある Antivenenian とは、venenian すなわち社会の不道徳及び無秩序を招く毒物への反対 (anti) を意味し、アメリカ禁酒協会やアッシュフィールド禁酒協会と同じく一九世紀前半に展開された禁酒運動を背景として一八三〇年設立されたものである。この協会では社会の不道徳や無秩序を招く恐れのある贅沢品、日常の飲み物としての蒸留酒、ワイン、阿片、タバコを薬用や神の聖餐式での使用を除いて禁止する誓約書が作成され、⁽⁹⁹⁾ 協会員は積極的禁欲の実践を求められた。ヒッチコック学長はこの協会設立当初より各学年の入学時にこの誓約書への署名を勧めてきた。彼の記録によると、一八三〇年から六三年までに二〇三三名中一四八五名の学生が、そしてクラークの学年では三二名中二二名がこの誓約書に署名をしている。⁽¹⁰⁰⁾ クラークが幼年期に父から禁酒について感化を受けたこと、クラークが札幌農学校で学生への徳育の一環として一八七六（明治九）年十一月二十八日「大学に關係する限り、薬用を除き阿片、煙草、アルコール飲料の使用を禁じ、また賭け事や神を冒瀆する言葉を禁じる」⁽¹⁰¹⁾ ことを内容とする禁酒禁煙の誓約書を作成し学生に署名を求めたこと、そして禁酒禁煙の誓約書と Antivenenian Society の誓約書との間に文体、内容、そして作成された意図に共通点を見い出せることを考慮すれば、彼もまた Antivenenian Society の誓約書に署名し、この協会からピューリタニズムに基づく道徳観の影響を受けていたことが想像される。

規律ある生活、良き友人達、全人教育、興味を充たしてくれる標本類、学識あり教養ある教授との人間的学問的交わり及び禁酒協会など、アマースト大学はクラークの人格形成や思想形成に多大の影響を与えた。そしてこの大学の全てに浸透していたのはピューリタニズム的雰囲気であった。よってこの大学のあらゆる思想的影響を余すところなく受け入れるためには内なる真のキリスト教信仰が不可欠となる。W・S・タイラー (William Seymour Tyler, 一八一〇〜九七年) 教授が「時間を正しく使い、様々な能力や機会を最もうまく活用し、すべての有用な知識を最もうまく用いるための最も確かな導きであり、最も強烈な刺激である」、「真の宗教の原理や精神」⁽¹⁰²⁾ の獲得を強調し

ているように、アマースト大学は真のキリスト教信仰を学生のあらゆる人格的思想的感化を真なるものとするために不可欠としていた。そこで同大学は他の会衆派教会系の大学と同様に、リヴァイバル（信仰復興）を通じてピューリタンの真のキリスト教信仰を学生に喚起、深化させていった。この大学では開学以来一八六三年までに一回のリヴァイバルが起り、クラークの在学時では彼が二回生の一八四六年にその記録がある。⁽¹⁰³⁾これらの指導者となったのは回心経験者の教授や牧師であり、彼等の聖書や説教を中心とした指導は学生の信仰を復興させる上で大きな力となった。さらに一八四六年のリヴァイバルには学生の両親、友人、親戚からの働きかけもあり、多くの学生が回心（conversion）を経験し、真のキリスト教信仰を獲得した。そしてクラークもまた回心を経験した一人であった。彼は母宛の書簡に、「長く正しい道を踏み外していた息子へのあなたの祈りは、私が謙虚に望み、信じた時に受け入れられました」⁽¹⁰⁴⁾と母親に対し謝辞を述べ、さらに「私は深く確信できるよう熱心に祈り」、「『神よ、我は信ずる。汝我の信仰なきを助けたまえ』と私が叫んだところ一つの変化が訪れ、その後「再び祈り、気持ちがいよいよ楽になり」、聖書を手に取った、⁽¹⁰⁵⁾と回心の様子を綴っている。このように彼は多くの学生と同様にリヴァイバルによる回心経験を通じて真のキリスト教信仰を獲得し、その信仰をもとにアマースト大学がもたらすピューリタニズムに基づいて思想基盤を確立した。

以上のようにクラークはアマースト大学において彼の思想の中核にあった宗教的素養をピューリタニズムに基づく思想基盤として確立し、その上に造化の妙理を探究する学問観、全人教育、文明国家を支える良き市民としての資質、禁欲的な道徳観を打ち建てた。そして彼が講義のみならず生活全体を通じて学んだ全人教育、道徳規範としてのピューリタニズムや市民の資質としてのデモクラシーが彼の教育思想の中核に据えられる事となった。

(五) ドイツ・ゲッティンゲン大学からの思想的影響

クラークは一八四八年アマースト大学卒業後、母校のウイリストン・セミナーで化学及び博物学の教職に就いた。⁽¹⁰⁸⁾そして彼は二年の教師生活を経て、一八五〇年ドイツのゲッティンゲン大学(正式名 Georgia Augusta Universität Göttingen)に留学した。この大学は他の領邦大学が持つ偏狭な教派主義やアリストテレス哲学及びスコラ哲学に基づく伝統的な学問観を否定し、学問の自由を重視する大学として一七三四年に設立された。またこの大学は一七三九年以降学術雑誌を発行し、一七五一年には学術協会を発足させるなどヨーロッパの学会に多大な影響を与え、さらに数学者ガウス(Johann Karl Friedrich Gauss, 一七七七―一八五五年)などの世界的権威ある科学者を輩出した実績を持っていた。

クラーク留学時のドイツの高等教育機関は研究機関としての大学が確立された時期であった。一八〇六年フランスのナポレオン一世に大敗後、首相のシュタイン(Heinrich Friedrich Karl Freiherr von Stein, 一七五七―一八三一年、在職一八〇七―一八〇八年)や同じく首相のハルデンベルク(Karl August Fürst von Hardenberg, 一七五〇―一八二二年、在職一八一〇―一八二二年)の上からの近代化政策のもと、研究を大学の中心的役割とするフンボルト(Karl Wilhelm von Humboldt, 一七六七―一八三五年)の理念を中心に教育政策が推進された。一八一〇年には学問の自由を保障し、自由な批判的精神を尊重し、学の生産に専念する学府として、従来の領邦大学とは異なる教育理念をもつベルリン大学が設立された。また一八一二年ギムナジウム卒業試験(大学入学検定試験)の徹底化に始まるギムナジウムの整備はギムナジウムを研究の基礎である一般教養課程の履修機関として位置付けた。そして一八一七年の宗務・公教育省発足後もフンボルト理念に基づく教育政策が採られ、一八四〇年代後半にはドイツ憲法において学問の自由が保障され、研究機関としての大学制度が確立した。このような過程を経てドイツの大学の多くはヨーロッパにおいて最高レベルの研究機関となり、また大学での研究を通じて生み出された知識や技術を産業界に提供

するなど、産業界の発展や国力の増大に貢献した。なかでもゲッティンゲン大学は一八〇七年にはガウスを、一八三六年には化学の世界的権威ヴェーラー(Friedrich Wöhler, 一八〇〇〜八二年)を教授に迎え、クラークの留学時には彼等のような世界的権威を有する大学としてドイツでも最先端の研究レベルを誇る大学であった。

この大学でクラークは一八五〇年から五二年まで二年余の留学生生活を過ごした。当時この大学は巨大な実験棟、解剖棟、約四〇万冊を所蔵する図書館、植物園などの優れた研究施設を備えており、そこには彼の研究生活を支援する最高の環境があった。そして彼はこの大学で化学担当のヴェーラー教授、鉱物学講義と結晶観察担当のヴァルタースハウゼン(Wolfgang Sartorius Baron von Walthershausen)教授に指導を受けた。⁽¹⁰⁾ よってクラークが彼等の指導からドイツの最先端の研究の理念及び研究方法を学んだと考えられる。

クラークはこの大学で博士号を取得すべく研究に励んだ。彼はアメリカで収集した鉱物を取り寄せ、その鉱物の化学的分析を行い、一八五二年に「隕石の化学的分析(On metallic meteorites)」で博士号を取得するが、彼が得たものは博士号だけではなかった。彼はアメリカとドイツを比較し、充実した初等教育機関や中等教育機関であるギムナジウムでの一般教養の徹底、優れた研究設備や豊富な蔵書の図書館を備えた研究機関としての大学、教授陣の時間的経済的優遇措置、学生に課される厳しい研究課題の中にドイツがヨーロッパの最先端の学問を維持・発展してきた要因を見出し、研究及び設備、環境面でドイツの大学がアメリカの大学よりもはるかに優れた研究機関であることを認識した。しかし彼はドイツでは「ピューリタンの考え方は間違はなく失われている」と、ドイツの研究中心大学とアメリカの liberal arts college との間に内在する違いを見抜いている。当時ドイツでは安息日を守らずとも嘘、盗み、殺人をしなければ宗教的な人間と見なされていた。⁽¹¹⁾ 彼は「全ての人間は自分自身の運命の建築家である」⁽¹²⁾ という言葉を信じ、「天は自ら助くる者を助く」⁽¹³⁾ と自分に言い聞かせ、忙しい最中でも安息日を守り、聖書を読む時間を持ち、ピューリタンとしての生き方を遵守しようとしていた。それは彼が「キリスト教と科学は決し

て相容れないものではなく、国民が神の教えに基づかない知識への誇りや、その知識の持つ偽りの洗練さや過度な高雅さから生ずる多くの悪影響にさらされる前にキリスト教が彼等の間に確立されなければならない⁽¹⁸⁾」と考えていたからであった。つまり彼は高度な学問的知識の優秀さに惑わされるのではなく、獲得した知識を善用する規範としてのキリスト教、とりわけピューリタニズムに基づく道徳観なしに、あるいは良き市民としての資質なしに最高の学問の達成は不可能と考えていた。これは彼が「アメリカの大学 (our colleges) は一般教育を完成させ、そしてドイツ方式の大学 (universities)、つまり法学部、神学部、医学部、哲学部は人々に専門への準備をしなければ⁽¹⁹⁾」⁽¹⁹⁾という全人教育を基盤として専門教育を施す高等教育機関を理想として示されている。

以上のようにクラークはゲッティンゲン大学でアメリカと対照的なドイツの高等教育観に触れ、研究中心主義の優秀性を見出した。また同時に彼はドイツにおけるキリスト教と学問の乖離を見出し、アメリカの人間形成を目指す全人教育の必然性を確信した。そして彼はアメリカとドイツの高等教育観の長所を統合し、全人教育並びにピューリタニズムとデモクラシーによる人間形成の上に、産業革命を支え、近代化を促進する専門性を有する人材を育成する高等教育観を確立させ、彼の教育思想の中核にこの高等教育観を据えた。

二―二 米国におけるクラークの研究・教育の実践

(一) アマースト大学での実践

クラークは帰国後の一八五二年十月十二日アマースト大学の理事会から分析化学及び応用化学教授(在職一八五二―五四年)、ドイツ語講師(在職一八五二―五三年)⁽²⁰⁾に任命され、母校で実践することとなる。

クラークは教授就任後理学科 (Department of Science) に教授の席を得た。⁽²¹⁾この学科は大学の卒業生が専門分野を深める目的で一八五三年一月より講義を開始し、⁽²²⁾地質学、数学・自然哲学・工学、化学、農業、鉱物学、動物学、

植物学、心理学・哲学史、文献学・英文学の九つの専門分野を設置した。⁽¹²³⁾そこで彼は化学の教授だけでなく、以前より化学教授が植物学を担当していたことに倣い、⁽¹²⁴⁾植物学の教授も兼任した。また五三年動物学教授のアダムス教授が黄熱病で病死すると、クラークは動物学も担当し、五四年彼は正式に化学、植物学、動物学教授（在職一八五四～五八年）に任命された。⁽¹²⁵⁾このように若き研究者であったクラークが専門性と研究を重視する理学科の教授に抜擢され、しかも複数科目を兼任したことは、彼がドイツで得た学問の専門性及び先進性をアマースト大学が高く評価したことを示すものである。ヒッチコック学長が一八五四年の辞任演説で「実験室がクラーク教授によって実験だけでなく分析化学及び応用化学にかなり適したものとなってきている」⁽¹²⁶⁾と述べているように、クラークはドイツで得た化学に関する最先端の知識、研究の理念や方法をアマースト大学にもたらした。

（二）アマースト大学の教育理念

このように一八五四年までクラークはヒッチコック学長のもとで彼の専門性をアマースト大学に導入することに努力した。しかしヒッチコック学長は同年七月「様々な仕事、特に大学行政に付随する様々な仕事を続けるには健康上不備である」⁽¹²⁷⁾として学長を辞した。代わって同年八月七日アマースト大学理事会の定例会でウィリアム・スターンズ（William Augustus Stearns, 一八〇五～七六年、在職一八四五～七六年）⁽¹²⁸⁾が学長に任命された。彼が就任演説で、「円満に発達した能力をもつ人間を育成する」⁽¹²⁹⁾「全人教育」、「肉体のより一層の健全さを獲得するまで最高の知的能力の達成や高貴な徳の形成は決してありえない」⁽¹³⁰⁾という立場から体育教育、そして「身体の様々な力に活力を与え」、「身体の様々な力の十分な発展にとつて絶対不可欠な自制を維持する」⁽¹³¹⁾「宗教教育の調和的發展を通じて」⁽¹³²⁾人間の最高の形（the highest style of man）を作り出すこと」を大学の教育目的として掲げているように、彼はクラークと同じ教育観を持つ人物であった。スターンズ学長就任以降クラークは新たな活動の場と彼の教育思想をより実

実践可能とする環境を得ることになる。

(三) アマースト大学での諸活動

スターンズ学長就任以降、アマースト大学では新たな学問研究施設及び寄宿舎が建設された。クラークは Appleton Cabinet, Williston Hall, East College, Barrett Gymnasium の建設に参画し、事業推進者としての才能を発揮した。⁽¹³⁵⁾なかでも Williston Hall は最新設備を備えた実験室を希望するクラークの望みを満たすために、ウイリストンの寄付金によって一八五七年建設された。⁽¹³⁴⁾クラークはこのホールの整備のためドイツへ向かい、ウイリストンの資金で化学の実験と分析に必要な最新器具を購入している。⁽¹³⁵⁾そして一八五八年五月十九日 Williston Hall の献堂式が行われ、同年クラークは化学教授（在職一八五八〜六七年）に就任すると共に、ドイツの最先端の研究設備が整った実験室を獲得した。また彼はスターンズ学長の「好意的で進歩的な不断の支援」や「前学長のもとで許されていたよりも多くの時間と機会」を与えられ、⁽¹³⁶⁾ドイツの大学と同様の研究の自由と彼自身の専門性を発揮する最高の環境を保障された。一方で彼の同僚のマレット（John William Mallet, 在職一八五四〜五六年）、彼の友人マンロス、彼の後継者ハリス（Elijah Paddock Harris, 一八三二〜一九二〇年、在職一八六八〜一九〇七年）らドイツ・ゲッティンゲン大学のヴェーラー教授の研究室出身者が化学教授を務めた。⁽¹³⁷⁾またクラークの教授就任以降ゲッティンゲン大学へ留学するアマースト大学卒業生が増加した。⁽¹³⁸⁾このように彼はアマースト大学にゲッティンゲン大学の高等教育理念を導入しただけでなく、両校の学術的関係を密接にした。

クラークは他に植物学の研究と学生への指導にも力を注いだ。彼が「温室を建て、そこに珍しい植物を集めていた」⁽¹³⁹⁾と J・M・タイラー（John Mason Tyler）が述べているように、クラークは自らも植物学への造詣を深めていた。また彼は一八五二年より植物学教授として学生を指導し、講義に留まらず学生達を植物採集や遠足へ連れて行

き、彼の植物学への情熱を学生に注ぎ込み、彼等の興味を喚起した。⁽¹⁴⁰⁾ このように彼は実物教育及び開発主義教育を通じて学生に造化の妙理を悟らせ、また学生の肉体を鍛えた。

一八五八年以降クラークは彼の活動の場をアマースト大学に限定しなかった。彼は一八五九年から六一年までマサチューセッツ州農業委員会で当時農業の高等教育の必要性を訴えていた農業界のリーダー達と交流し、一八六〇年から六一年までハンプシャー農業協会会長を務め、⁽¹⁴¹⁾ 農業及び農業教育に傾倒していく。

途中クラークは一八六一年から六三年まで「人々が今まで享有してきた自由、共和党の諸機関、最良の政府を守る」、「良き戦士としての全ての義務を果たす」⁽¹⁴²⁾ ためにマサチューセッツ第二義勇軍連隊を率いて南北戦争に参加する。ボストン知事アンドリュー (John A. Andrew) がクラークを「賢明で勇敢な指揮者」⁽¹⁴³⁾ と褒め称えたように、クラークの率いる義勇連隊は順調であった。しかし一八六三年春のチャンティリーの戦いで彼の連隊が大打撃を受けたことを契機に彼は戦陣を離れ、アマースト大学に戻った。彼はその理由を「軍隊が縮小したこと」や「そのような状況にある軍隊に所属しているよりも、故郷にいるほうがより役に立つ」⁽¹⁴⁴⁾ としてしている。

クラークは退役後アマースト大学に戻ると、一八六四年アマーストからマサチューセッツ州議会上院議員に選出された。⁽¹⁴⁵⁾ 彼はその後も続けて六五年と六七年も議員を務めた。彼の教え子のバーゲスが退役以降のクラークを「アマーストの町を代表して州議会に参加するためにいつも授業を休講にし」⁽¹⁴⁷⁾ た「政治家であり、推進者」⁽¹⁴⁸⁾ と述べているように、彼は政治家としての活動に多くの時間を割いた。このような彼の活動の背景には一八六二年六月リンカーン大統領の連邦政府で可決された「農業および機械技術の振興のため大学を建設する意図の下に、国有地を各州並びに各準州に交付する法」(通称モリル法 Morrill Act) の存在があった。⁽¹⁴⁶⁾ このモリル法は「他の科学や古典の科目を除外することなく、軍事教練を含め、農業と機械技術に関連する様々な学問分野を教授」⁽¹⁴⁹⁾ し、「生涯の仕事に身を置く産業労働者階級の全人教育と実務教育を促進する」⁽¹⁵⁰⁾ ことを目的とした土地付与大学 (land-grant college) の

設立を促すものであり、彼の教育思想をほぼ具現化した法律であった。よって彼がそこに自らの存在価値を見出し、アマーストへの農科大学誘致の牽引車役として活動したことはけだし自然であったといえる。

以上、クラークのアマースト大学教授時代を総括すれば、彼の高等教育観を中心に彼の教育思想とりわけ専門性を發揮した時期であった。さらに彼の植物学の指導に見られる実物教育と開発主義教育は彼の教育思想を具体化する彼の教育実践の特徴といえる。しかし彼はあくまで一学科の教授であり、行政官や政治家、軍人等の活動を主としていた。さらにアマースト大学は典型的な liberal arts college であった。随って彼が十分に彼の教育思想に基づき実践したとは考え難い。よって次は彼の教育思想をより総合的に捉えるためにMAC学長としての彼の実践を考察していく。

(四) マサチューセッツ農科大学の教育理念

クラークは一八六七年八月、MAC理事会によって第三代学長に選出され、実践の場をアマースト大学から同じ町にあるMACへと移した。

MACは初代学長フレンチ (Henry Flagg French, 一八一三〜八五年) が「肉体の鍛錬」⁽¹⁵⁾、「最高の美的道德的教養を兼ね備えた精神の最高の陶冶」⁽¹⁶⁾、「科学的、実地的な農業経営者」の育成を大学の目的としたように、全人教育による人間形成と専門教育による専門家養成を定めたモリル法により設立された実業高等教育機関であった。しかしウィリアムズ大学 (Williams College) 出身のチャドボーン (Paul Ansel Chadbourne, 一八二三〜八三年) が第二代学長に就任すると、彼は第一に「理知的で、完全な教養ある人間を育成」し、次に「実地的な農業経営者を育成」する、全人教育を基礎とした専門教育を大学の教育目的として掲げた。このチャドボーン的高等教育観はクラークのそれと合致するものであるが、両者の高等教育観には根本的な違いがあり、その違いを彼等が作成したカリキュ

ラムに見て取れる（巻末資料2）。一八六七年及び六九年のクラークのカリキュラムでは農業をより総合的に捉え、あらゆる問題に対処できる人間の育成を意図した多様な農業関連科目が挙げられ、また全人教育関連科目が雄弁術、演説法、討論等を中心に全学年で課されている。このようなカリキュラムの相違はクラークが liberal arts college だけでなくドイツの研究重視の高等教育機関を体験していたことに起因すると考えられる。これは第四期生リビー（Edgar Howard Libby）がクラークの教育を「体系的な学習によって精神を発達させ」、「若者に自然法則を教え」、「あらゆる職業に役立つ事実や原理を身に付け」、「実用的な知識を用いて以前は軽蔑されていた職業を如何にして魅力的に、名譽ある、有益なものとするかを示す」ものと捉えていることや、クラークが「自らの専門についての演説ができる教養ある農場経営者」を目指したことに示されている。⁽¹⁵⁴⁾

またクラークは農業実習と軍事教練を学生に課している。農業実習は「農場や果樹園の全ての仕事が学生によって行われることが実用的である」⁽¹⁵⁵⁾との彼の考えに基づき、開講当時は秋学期に限り無償で隔日二時間⁽¹⁵⁶⁾、一八六九年以降は無償で週六時間の農場及び果樹園での作業が学生に課された。そして更なる作業の希望者には時給制で賃金を払った。⁽¹⁵⁸⁾クラークの思想形成過程を踏まえれば、これは労働の対価としての報酬の価値と意味を体得させるカルヴィニズムの職業観に基づくものといえる。次に軍事教練はモリル法に規定されたもので、一八六九年に歩兵訓練から団体訓練、そして武器使用などがカリキュラムに組み込まれた。⁽¹⁵⁹⁾またクラークが「軍事教練は体育発達の優れた手段」⁽¹⁶⁰⁾と述べているように、軍事教練は強健な肉体の形成をも兼ねていた。農業実習もまた軍事教練と同じく肉体を行使するものであり、またこれらの科目が四年間に亘り学生に課されたことは、彼がこれらの科目を理論と実践の統一のみならず全人教育の一角を担う体育を行うものとして重視していたことを示すものといえる。

以上に加えてクラークは知育、体育と共に宗教指導等を通じて学生への德育を行った。MACの学生は開講当初から日曜日には教会の礼拝かバイブルクラスへの参加を義務付けられ、⁽¹⁶¹⁾宗教指導を受けてきた。しかし当時同大学

に教会はなかったため、第一期生カズウェル (Lilley B. Caswell) が「日曜日の午前中、農科大学生が寄宿舎を出発し、二列に並んでアマースト大学の古い教会に行進し」、「その教会で学生は傍聴席に案内された」と述べているように、MACの学生はアマースト大学のジョンソン・チャペルで礼拝を行い、宗教教育を受けた。⁽¹⁶⁵⁾ MACは州立大学という性格上特定宗派の教義の指導を禁じていたが、アマースト大学にある会衆派教会のピューリタニズム的な宗教的雰囲気から影響を受けていたことがわかる。このようなアマースト大学の影響は学生によるワシントン・アービング文芸協会⁽¹⁶⁶⁾ (Washington Irving Literary Society) 及び一八六八年の大学キリスト者連合 (College Christian Union) の設立に繋がった。ワシントン・アービング文芸協会はアマースト大学の影響を考えると、良き市民の育成、討論及び演説能力の向上をその目的としていたと考えられる。次に大学キリスト者連合は学生の自治組織であり、その会合は毎週土曜日の晩に開催され、学生達は聖書を朗読し、讚美歌を歌い、討論を行った。⁽¹⁶⁷⁾ その後一八六九年大学会館 (College Hall) の建設に伴いその一階にチャペルが建設されると、一八七〇年に道德哲学兼心理学教授のパーカー (Henry W. Parker) が宗教教育を担当し、⁽¹⁷⁰⁾ クラークは学生達にパーカーの教会礼拝とバイブルクラスへの参加を義務付けた。⁽¹⁷¹⁾ 「聖書は全ての宗教的指導の基礎」であるとするクラークと同じく、パーカーは「全ての真の教育は自己教育」であり、学生自らが「自力で (聖書の) ページや章の本質を見出す」ことが必要と考えていた。よってパーカーの宗教教育は学生自らが聖書の真理を見出し、そこに自らを重ね合わせ、自己啓発を通じて学生達に自己改革を促し、聖書中心主義のピューリタニズム的道德観を形成させることを目指すものであったといえる。

(五) クラークの教育実践を支えた諸要因

以上からクラークがカリキュラム全体や宗教教育等を通じて彼の教育思想を如何なく実践したことがわかる。こ

の背景には彼が全権を握る学長であったことが指摘できるが、他にも重要な要因があった。一つはストックブリッジ (Levi Stockbridge) 、グッデル (Henry Hill Goodell, 一八三九―一九〇五年) 、スネル (Ebenezer Strong Snell, 一八〇一―七六年) 、ゲスマン (Charles A. Goessmann) といった草創期のMACを支えた優秀な教授陣の存在である。ストックブリッジは「告解を聞く司祭 (father confessor)」と学生に評され、教授の中の「釣り合いの輪」⁽¹⁷⁴⁾として性急なクラークに冷静な判断を下す良き補佐役であった。次にグッデルはクラークが同大学教授に招聘した彼の教子である。グッデルは開講以来現代語教授を務め、一八六七年から六九年まで軍事教練担当も兼ねるなど、同大学の教授不足を補う有能な教授であった。またスネルはアマースト大学のクラークの恩師で、同僚であり、両大学の関係を密接にした。最後にゲスマンはクラークのゲッティンゲン大学留学時の友人であり、ヴェーラー教授に認められ、五年間同大学で分析化学と有機化学の講義を担当した優れた化学者であった。

次に二つめはMACの順調な発展である。MACでは一八六八年に多くの農業委員会により六つの奨学金制度が設けられ、一八七一年には大学対抗レガッタでハーヴァード大学とボストン大学に勝利して優勝し、MACの名前をアメリカ全土に知らしめた。またクラークは一八七三年に「植物の樹液の循環」⁽¹⁷⁵⁾、七四年に「成長過程の植物の膨張力の測定」などの当時最先端の研究論文を発表し、特に「植物の樹液の循環」は当時の農業教育の権威であったハーヴァード大学のアガシズ (Louis Agassiz) 教授に「このような論文を作り出したことは、その大学が費やした全てのものに相当する十分な見返りであった」との高い賞賛を受けた。このようなMACの発展に対して当時のアマーストの地方新聞 (Amherst Record) が「大学の最も心優しい友人達が樂觀的に予期していたことさえ遙かに上回る」⁽¹⁸²⁾成果をあげたという記事を掲載していることはアマーストの人々がMACとクラークを高く評価していたことを示すものである。

しかし最も重要な要因はクラークの人間性と彼の優れた教育者としての資質である。大学対抗レガッタでMAC

の学生が勝利した時、彼が「オールを漕ぐ学生と並走して興奮して水の中に落ち、勝利した乗り手たちが観客席へ堂々と行進する中でかすれた声で叫んでいたあの日と、夜九時半頃彼が急いで馬を走らせ、馬が泡を吹いているにもかかわらず、『農科生が勝った！』(“Aggies have won!”)と連呼しながら町へ駆け込んできたその日の夜を忘れることができるだろうか」というグッデルの述懐はクラークが学生と喜びを分かち合う教育者であったことを示すものである。また彼は学生にデモクラシー社会の市民の資質の重要性を説き聞かせた。⁽¹⁸⁶⁾第三期生ベンハローが「彼の生きた手本としての影響力は彼の学生にとって計り知れないほど恩恵を与え、話し言葉以上に一層偉大な価値があった」と述べているように、クラークは市民的資質を言葉ではなく自ら率先垂範して学生達に伝えた。また彼は主に植物学を通じて学生の興味を喚起する開発主義教育と実物教育を行った。彼が「彼の指導を通じて、学生を刺激し、彼等が一層科学的に発達するために必要な熱烈な興味と知的好奇心を喚起した」という第一期生ボウカー⁽¹⁸⁷⁾(William Henry Bowker)の述懐、「自然を情熱的に愛する彼は他人に同じような情熱を喚起させる稀な能力を持ち、⁽¹⁸⁸⁾「喜びを持ってエデンを追求」し、「講義室に彼自身の経験に基づいて蓄えた情報や彼をとっても楽しい友人と感じさせる人を引き付ける力をもちこみ、彼と接した全ての人々の興味を必ず刺激し喚起した」というグッデルの述懐中に見て取れる。このようにクラークは学生に非常に近い存在として深き愛情をもって学生と接し、彼等に多大の学問的人格的影響を与えていた。

このような要因を有しM A Cは順調な発展を見せる。しかし突然の財政危機がその発展を妨げた。当初M A Cの運営資金は土地供与の基金からの税収入、学生の授業料、そして大学の農場生産物の収入によって賄うとされていたが、⁽¹⁸⁹⁾実際はマサチューセッツ州からの資金援助無しでは大学運営は不可能であった。そのためM A Cは一八六七年以降州から資金提供を受けてきた。⁽¹⁹⁰⁾しかし、一八七〇年州の資金提供打ち切りがマサチューセッツ州議会において決議されると、財政状況は一変した。⁽¹⁹¹⁾クラークはこの決議がM A Cについてよく知らない議員や農業教育を理解し

ていない議員によつてなされたものであり、同大学の教育は農業経営者の息子に興味を与え、その娘に利益をもたらすものであると反論した。⁽¹⁸⁷⁾しかし彼の反論に対してマサチューセッツ州が具体的な行動を起こすことはなく、MACでは七三年から学生数が減少し始め、⁽¹⁸⁸⁾七四年以降新たな発展は見られず、深刻な財政危機に見舞われた。

以上、クラークのアメリカにおける教育実践を総括すれば、彼が彼の人間性、社会性、宗教教育、実物教育、開発主義教育等を通じて、円満な人格を備えた人間に専門性を育成するものであったといえる。そしてピューリタニズム及びデモクラシーを基調とした知・徳・体の調和とれた人間の育成が彼の教育思想の特徴である。そしてこの教育を真に意義あるものとさせるためにキリスト教は絶対不可欠な要素であった。以上を踏まえた上で次章で札幌農学校におけるクラークの教育思想及びその実践を捉えることとする。

三 クラークと札幌農学校——クラークの目指した人間像——

本章では前章の考察を踏まえて、札幌農学校におけるクラークの実践を捉え直し、同校で彼が目指した人間像を考察する。

三―一 札幌農学校におけるクラークの教育実践——キリスト教と全人教育を中心に——

札幌到着以降、クラークは開拓使の顧問として忙しい毎日を送った。⁽¹⁸⁹⁾彼は自らの専門性を持って札幌農学校の付属農園の整備や酪農や農作物、とりわけ甜菜の栽培に力を入れ、北海道農業の発展に貢献し、⁽¹⁹⁰⁾帰国後も開拓使の要請に応え、任期が解かれてもなお日本のために尽力した。⁽¹⁹¹⁾一方で彼は実質的学長として同校の学問的制度的整備

に尽力した。なかでも彼の学生への教化は同校を特色付けるものであった。

クラークが札幌農学校で目指したものは円満に発達した人格と教養を備えた、北辺の守備と開拓の指導者たる人物の育成であった。アメリカでの彼の教育実践から判断すれば、その人格と教養は知・徳・体の調和的な発展を全人教育によって期すものであり、大前提としてキリスト教の感化がある。よってクラークの教育実践の主要構成要素はキリスト教と全人教育である。これを踏まえて同校における彼の教育実践を捉え直すと各所で彼の人格及び教養形成の理念を垣間見ることができる。

まずカリキュラムからクラークの全人教育の影響を見て取ることができる。彼の全人教育とは専門に片寄らず、対象を多角的に捉え、自己の良心に従って決断し実行することのできる人間を育成するものである。なかでも彼が雄弁術等を重視したのはキケロのように全ての学問を統一するものが雄弁術と捉えていたことを示すものである。

この雄弁術、演説法等を学び実践する有益な場とされたのが開識社であった。開識社はクラークの指導のもとに(196)一八七六(明治九)年十一月に設立された文芸協会で、「会員の文体と演説を進歩させること」を目的とし、英語及び日本語を用いて朗読、演説、作文、討論を中心とした学生の自治組織である。その活動内容から開識社は(198)アマースト大学の文芸協会やM A Cのワシントン・アービング文芸協会と同様に文明国家の良き市民の資質を育成し、全人教育の一環として学生の人格的学問的陶冶の重要な場を提供していたと考えられる。

またカリキュラムの中で各学年で必修とされている軍事教練と農業実習にもそれら自身の教育目的以外に全人教育の一翼を担ったと考えられる。まず軍事教練が実際に開始されたのは演武場落成後の一八七八(明治一一)年十二月であるが、(199)クラークは北海道で軍務に就く指導者の育成だけでなく肉体の鍛錬による体育も目指したと考えられる。次に農業実習はM A Cと同様に理論と実践の統一を目的としていた。学生は週二回各三時間の農業実習を課され、排水溝の掘削などの肉体労働、播種や刈取などの農作業、農園管理方法の伝習、試験栽培を行い、さらに実

習一時間につき五銭が支払われた。⁽²⁰⁰⁾これは肉体労働を卑しいものとする当時の学生に勤労の習慣を養い、労働の対価としての報酬の正当性を理解させると同時に、⁽²⁰¹⁾クラークが労働報酬の使途を重視するカルヴィニズムの職業観に基づいて勤労の精神を培うと共に、肉体を鍛錬することも意図していたと考えられる。

このようにしてクラークは全人教育を行ってきた。そして彼の全人教育と車の両輪の如く調和を保ち互いの影響力を真ならしめたものがキリスト教であった。よって以下では彼のキリスト教による人格的・道徳的陶冶を見ていく。

クラークのキリスト教による感化の先駆けは札幌農学校の開校式直後に彼が学生に伝えた「紳士であれ！(Be Gentleman)」という訓辞であった。この訓辞は厳しい規則では「人間を作ることとはできない」とするクラークの⁽²⁰²⁾人間形成重視の教育思想から生み出されたものである。第一期生大島正健が、クラークが翌日から学生を紳士として扱い粗暴な学生にも自尊心を持たせたと述べているように、この訓辞は学生の間に浸透していく。彼は学生を規則で縛るのではなく、⁽²⁰³⁾彼等の道徳性を陶冶し、⁽²⁰⁴⁾彼等自身を律することを要求した。

そしてクラークは横浜で学生用に購入した聖書三〇冊の使用を決意する。しかし日本では一八七三(明治六)年キリスト教禁制の高札が国際関係上撤去されたとはいえ、教育機関でのキリスト教の教授は厳禁であった。しかし開拓使長官黒田清隆の理解により聖書の使用が黙認されることとなった。開校式直前の八月初旬石狩川視察の際に黒田はクラークと宗教についての意見交換をしている。その時クラークは「聖書は本の中で最良のもの」⁽²⁰⁵⁾と説得するが、黒田は「公に聖書を読んだり、学生が個人的に使用するために聖書を与えてはいけない」⁽²⁰⁶⁾と頑なに政府の役人の立場を堅持した。しかし黒田はこの議論の一カ月後にクラークに会い、⁽²⁰⁷⁾学生への徳育を求めている。これに対しクラークは学生への徳育は「常に聖書に言及しなければできない」⁽²⁰⁸⁾と彼の信念を貫いた。そして翌日黒田はクラークの聖書の使用を黙認した。

このように黒田がキリスト教に対し柔軟な考えを示した背景として二つが考えられる。一つは学生の徳育問題で

ある。開拓使仮学校は一八七三年三月財政的な問題や学生の不道徳な行為が原因で一時閉校になった。⁽²⁰⁾また札幌農学校第一期生が玄武丸で札幌へ向かう途中で女工に割り当てられた一等船室の真上の甲板を踏み鳴らして放歌高吟した事件があった。⁽²¹⁾こうした不道徳な学生の徳育問題が黒田の胸中にあつたと考えられる。もう一つは黒田の西欧文明への理解である。黒田は開明的な薩摩藩の出身であり、薩英戦争で西欧文明国と日本の国力の差を痛感した。また彼は一八七一（明治四）年米欧を訪問後欧米諸国を範として、北海道の総合的な近代化を推進すべく彼独自の人材育成の政策を展開させた。さらに彼は札幌農学校開校式の式辞で「徒ニ慣習ニ因仍シ格致ノ学ヲ講ジテ以テ之ヲ闡明推広スル能ハザルヲ以テ終ニ其進歩ノ効ヲ見ズ」、「農学校ヲ設ケ教師ヲ海外ニ聘シ英ヲ育シ蒙ヲ啓キ以テ農学ノ面目ヲ一新セント欲ス」⁽²²⁾と西洋文明の摂取に積極的な姿勢を見せている。このように彼は西洋文明の有用性を重視し、且つその思想的背景に対しても寛容な姿勢を持っていた。よつて黒田の開明的な思想や西洋文明への柔軟な姿勢がクラークのキリスト教に基づく教育実践を黙認させたと考えられる。

クラークの書簡から判断すると、彼が札幌農学校で聖書によるキリスト教の指導を開始したのは一八七六年十一月中旬頃からである。聖書解禁以降、彼は主に日曜学校という形で、祈りと聖書を中心とする指導を行った。⁽²³⁾彼は聖書の良い節を選び学生に覚えさせ、また学生に聖書から節を選ばせ、⁽²⁴⁾それが良い節であれば彼は惜しめない賞賛を与えた。⁽²⁵⁾大島が「私達は先生の高い評価を受けるために聖書の良い節を何度も探し」、「徐々に聖書の専門用語に慣れ、かすかにその意味を理解するようになり」、「私達は聖書の知識に親しみ、そしてその知識を増やしてい」⁽²⁶⁾たと述べているように、クラークは開発主義教育を通じて学生自らが聖書を通じて信仰を深めさせていった。また学生が聖書の教義上の難問の説明を求めた時、クラークは「聖書にある生活において学ぶべき重要なこと」に「従い、実践しなさい」⁽²⁷⁾と述べ、教義に拘ることなく一意専心聖書の真理を実践することを重視した。第一期生内田澁が「この大学で、救いへと導く唯一の書物である聖書の真理を求め得たのは、あなたの影響によるものです」⁽²⁸⁾と述

べていることにも同様のことが窺える。さらにクラークは自らも聖書を熱心に読み、⁽²¹⁸⁾聖書は「最もすばらしい本」であり「私がそれを読めば必ず何か新たな真実をその中に見つけ出す」と学生に述べ、自らも率先垂範して聖書の真理を見出し、神の前で全ての人間が等しく学ぶ者であることを体現した。こうした「時に命令的で時に父が子どもに語りかけるように説き聞かせる」⁽²²⁰⁾クラークの指導によって、学生はキリスト教に「心からというよりはむしろ感覚で近づい」ていった。⁽²²¹⁾

クラークは日曜学校と並行して他にも学生に様々なキリスト教の指導を行った。一八七六年十一月二十八日、彼は学生と共に「薬用を除き阿片、煙草、アルコール飲料の使用を禁じ、また賭け事、神を冒瀆する言葉を禁じる」ことを内容とする「禁酒禁煙の誓約 (temperance pledge)」に署名した。この誓約の内容はクラークがアマースト大学学生時代に所属した Antivenuean Society やアメリカ禁酒協会の誓約の文章内容と酷似しており、彼が聖書を道徳規範として積極的な禁欲的生活を実施するピュリタンとしての生き方を学生に求めたものといえよう。

クラークは他にも学生達をよく遠足に連れて行き、植物学や鉱物学の標本の採集を行った。⁽²²³⁾これは学生への実物教育として彼がアマースト大学やMACで実践したものである。彼が標本採集を「キリスト者の活動 (Christian work)」と位置付けているように、この活動は神の前で全ての人間が等しく学ぶ者であることを体現し、造化の妙理を探究する彼の学問観を学生に伝えるものであった。その一つの例が一八七七 (明治一〇) 年一月三十日彼が学生と共に行った手稲山の雪中登山である。⁽²²⁴⁾この登山は地衣類の採集と学生の勇気の鼓舞及び身体の鍛錬が目的とさ⁽²²⁵⁾れていた。手稲山頂上附近にクラーク一行がさしかかった時、彼は第一期生で最も長身の黒岩四方之進を呼び寄せ、土足で自分の背中に乗せて小高い木の上にある地衣類を取らせた。⁽²²⁷⁾このクラークの行動は「三尺下がって師の影を踏まず」の儒教的雰囲気の中で人格を形成してきた当時の学生には理解できるものではなかった。しかし神が創った偉大なる自然を学生と共に探究しようとするクラークにとっては自然の行為であり、このようなクラークの態度

が言葉以上に学生を感化したといえる。またクラークは帰途列の最後尾を務め、疲れ果てた学生には馬を雇うなど、一人の落伍者も出すことなく学生全員を寮へと連れ帰った。⁽²²⁸⁾このような学生を氣遣う優しさや深い愛情もまた学生がクラークを信頼し、彼の教えを純粹に受け入れていく重要な要因になったといえよう。

こうしたクラークのキリスト教の指導は一八七七年三月三日、彼が日本を發つ約一カ月前に「イエスを信ずる者の誓約 (Covenant of Believers in Jesus)」という形で結実する。この誓約は学生が「神から人間への言葉による唯一で直接の啓示」、「完全な絶対に正しい導き」⁽²²⁹⁾である聖書に基づくピューリタニズム的道德観を確立し、以降その道德に基づいて生きることがクラークと共に誓うものであった。そして神のもとで生きる人間として彼と学生の生涯の絆を結ぶ一つの形でもあった。

以上を総括すればクラークの学生への宗教指導は聖書指導だけでなく、彼の造化の妙理を探究する学問観に基づく指導であり、実物教育、開発主義教育、率先垂範による生活全体を通しての総合的なキリスト教理解であり、信仰への導きであり、加えて彼の民族を越えた深い愛情が学生のキリスト教を深化させたといえよう。

三―二 クラークが目指した人間像

このようにクラークは札幌農学校にキリスト教と全人教育を導入し、実践してきた。その実践はとりわけ彼の M A C での実践と類似しており、それは彼の文明史観が大きく作用したと考えられる。彼は M A C で「教養ある農場経営者」の育成を目指していた。これは彼がそれまで軽視されていた農場経営者もまた一国を支える教養ある人間であるべきだと考えていたからであった。また彼は日本の封建時代を「身分制度と慣習の虐政」⁽²³⁰⁾と捉え、また封建体制崩壊後の人々を「奇妙な半開状態」⁽²³¹⁾と捉えている。すなわち彼は日本の実態を文明史観で半開と捉え、札幌農学校においてもアメリカの農業経営者と同様に文明国家を支える円満な人格と教養を備えた人間を育成するキリス

ト教と全人教育の必要性を痛感し、これらを同校に導入したといえる。彼が開校式で「教育を受ける全ての学生の胸中に崇高なる志 (lofty ambition) を喚起するべきだ」⁽²³²⁾と述べていることにも窺える。

このようにしてクラークは札幌農学校にキリスト教と全人教育を導入したわけであるが、これらの系譜を辿ると彼が最も強烈な思想的影響を受けたアマースト大学⁽²³³⁾の教育理念に辿りつく。この大学の目指す人間像はスタンズ学長が目指した「人間の最高の形」やクラークの同僚であるシーリー (Julius Hawley Seelye, 一八二四〜九五五年) 教授がしばしば学生に述べた“Amherst aims to teach its student how to think for himself”⁽²³⁴⁾という言葉に集約されている。すなわち同大学が目指すギリシア人やローマ人が理想とした精神も肉体も健全で、キリスト教とりわけビュリタニズムに基づくストイックな道徳心とデモクラシーによつて涵養される良識を持つて自らの責任で自らの行動を律し、判断を下し実行する人間がクラークによつて札幌農学校でも目指された人間像であつたといえよう。

おわりに 札幌農学校の建学の理念

札幌農学校はその構想段階で見られるように、北海道の総合的な近代化を促進するために必要とされる「実学」を身に付けた人材の育成をその主たる目的としていた。それはアイヌ人やロシア人の問題に見られる内憂外患の中にあつてそれらの諸問題に早期に対処すべき重要な責務を開拓使が負つていたためである。しかしクラークが彼の教育思想を同校に導入することにより、同校が目指す人間像は大きく変わった。第二期生新渡戸稲造が同校の教育を「産業科学分野や工業科学分野」及び「天然資源及び製造業の発展と先進文明を維持」する仕事に相応しい学生の能力の育成と「将来の地位に相応しい自己修養の概念の発展」⁽²³⁴⁾と評しているように、同校の教育は北海道の指導

者として「実学」だけでなく、それを扱う人間の人格と教養の形成を目指すものとなった。

このクラークが目指す教養と人格は彼の思想形成とその実践を通じて垣間見ることができる。彼が思想形成期を過ごしたニュートンランドはピューリタニズムとデモクラシーが車の両輪の如く調和を保ち、その影響を保持していた。そのような中で彼はとりわけアマースト大学在学中ピューリタニズムに基づくストイックな道徳観を形成し、デモクラシー社会の良き市民としての資質を身に付けた。また彼はギリシアやローマの古典を通じて良く生きるための知恵と、精神も肉体も健全なギリシア人やローマ人の理想的人間像を学び取った。さらにヒッチコックを初めとするアマースト大学の教授から大自然の造化の妙理を探究するキリスト者の姿勢と学問観を身に付けた。そして何よりも強烈な影響は、これら全てを自らの血肉の如くにする、リヴァイバルを通じた回心による真のキリスト教信仰の獲得であった。このような知・徳・体の調和的發展を期すアマースト大学の全人教育がクラークの教育思想の根底に据えられた。そして彼はドイツ留学時にドイツの研究重視の学問観に優秀性を見出す一方で、その知識や技術を運用する人間を形成する全人教育の重要性を確信し、全人教育を大前提として専門性を身に付ける彼の高等教育観を形成した。

クラークはドイツで上述のような経験をしたからこそ、アマースト大学やMACで「実学」を重視しながらも、学生の人格と教養を形成することを一層重視した。そのために彼が実践したのは実物教育と開発主義教育、ピューリタニズムに基づく道徳観と良き市民としての資質の率先垂範であった。彼は学生の学問的人格的道徳的指導を通じて学生の興味を喚起し、彼等自ら円満な人格と教養を涵養するように導いていた。

上述のような過程を経て形成されたクラークの教育思想とその実践の全てが札幌農学校で行われた。クラークの教育思想とその実践は明治政府のキリスト教禁教政策、天皇中心の国家体制とは思想を異にするものであるが、クラークの禁欲的なピューリタンの道徳の実践が学生の持つ武士のエートスと合致することによって学生に容易に受

け入れられたと考えられる。また開明的な黒田の理解と、クラークと学生と間の強固な信頼と民族を越えた師弟愛も彼の教育実践を可能とさせたといえよう。

以上を踏まえれば、札幌農学校建学の理念とは北海道の内政を進め、ロシアの南下防衛体制を整備するため、まず北海道発展の基礎となる農業の「実学」に関する知識と技術を兼ね備えた指導者の育成だけでなく、その指導者が強健な肉体、健全な精神、厳格な道徳心、物事を多角的に捉える幅広い見識、そして近代国家の形成に牽引車的に生きる人間——社会性、人間性、良識、良心を総合して備えた極めて自立した一人の人間を育成することであったといえよう。

注

- (1) 北海道大学ホームページより <http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/syllabus/idea.html>
- (2) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』通史一、一九八四年、二六三頁。
- (3) 同右 二六四頁。
- (4) 同右。
- (5) 大山綱夫「研究ノート クラークとキリスト教」『北大百年史編集ニュース』第五号、一九七八年七月、一頁。
- (6) 日本史籍協会編『明治初期各省日誌集成 開拓使日誌』一、東京大学出版会、一九八七年、九頁。

- (7) 同右 九、一〇頁。
- (8) 同右 一〇頁。
- (9) 同右 八四頁。
- (10) 同右 八五頁。
- (11) 同右。
- (12) 明治一八年十一月刊行『開拓使事業報告附録 布令類聚』上編、大蔵省、一頁。
- (13) 井黒弥太郎著『黒田清隆』吉川弘文館、一九七七年、四九頁。
- (14) 「開拓使見込大略上申」『北大百年史』札幌農学校史料(二)、ぎょうせい、一九八一年、三頁。
- (15) 同右。
- (16) 日本史籍協会前掲書 一五九頁。
- (17) 同右 一六四頁。
- (18) 同右 一六六頁。
- (19) 同右 一六七頁。
- (20) 井黒前掲書 五二頁。
- (21) 「女子留學生派遣の儀正院へ伺」『北大百年史』札幌農学校史料(二)、六頁。
- (22) 同右。
- (23) 「開拓使仮学校規則」同右 二七頁。
- (24) 同右。
- (25) 「東京に仮小学設立及び外国人教師雇入の儀正院へ伺」同右 一六頁。
- (26) 「仮学校内則」同右 四五、四九頁。
- (27) 「公費生徒廃止に付上申」同右 六一頁。
- (28) 同右 六一頁。
- (29) 同右。
- (30) 同右。

- (31) 同右 六一頁。
- (32) 同右 六二頁。
- (33) 「北海道の地質調査その他に付黒田開拓次官とケブロンとの会話」同右 八二頁。
- (34) 同右。
- (35) 同右。
- (36) 「仮学校則例」同右 八五頁。
- (37) Horace Capron, and his foreign assistants, *Reports and official letters to the Kaikakushi, Abstract of first annual report of Horace Capron, Kaikakushi, 1874, p.51.*
- (38) ditto.
- (39) 「専門科開設ノ義伺」『北大百年史』札幌農学校史料(二)、一五六頁。
- (40) 同右。
- (41) 『北大百年史』通説、ぎょうせい、一九八一年、三一頁。
- (42) 「教頭以下教師雇入、諸規則学則並に器械購入伺」『北大百年史』札幌農学校史料(二)、一六一頁。
- (43) 同右。
- (44) 同右。
- (45) 「農学教師雇入の儀伺」同右 一六九頁。
- (46) 同右 一六九～一七〇頁。
- (47) 「教頭外二名の専門科教師雇入に付吉田公使へ依頼」同右 一七六頁。
- (48) 同右。
- (49) 『北大百年史』通説、三一頁。
- (50) 同右 三一～三三頁。
- (51) クラーク書簡一八七五年十一月四日付ノースロップ宛『北大百年史』札幌農学校史料(二)、一九六頁。
- (52) 「クラーク雇入に異議なき旨外務省へ回答の件通知」同右。
- (53) 同右。

- (54) 同右 一九五頁。
- (55) 「クラーク条約書」同右 二〇〇頁。
- (56) 「米人教師雇入等に関する吉田全權公使よりの通知送付の件」同右 二〇九頁。
- (57) 『北大百年史』通説、二三頁。
- (58) 同右。
- (59) “Address of President W. S. Clark. August 14, 1876.” (高倉新一郎解題『復刻札幌農学校』北海道大学図書刊行会、一九七五年所収)
- (60) 同右。
- (61) *Family Record*, University of Massachusetts Archives 所蔵。
- (62) *History of the Town of Ashfield Franklin County, Massachusetts from its Settlement in 1742 to 1910*, the Town, p.43, University of Massachusetts Archives 所蔵。
- (63) ditto, p.195.
- (64) *Vital Records of Ashfield Massachusetts to the 1850*, Boston, the New England Historic Genealogical Society, 1942, p.30.
- (65) ditto, p.28.
- (66) ditto, p.29.
- (67) ditto, p.266.
- (68) 岡本勝「十九世紀前半の Temperance 運動」『同窓社アメリカ研究』一一一、一九八五年、一〇九頁。
- (69) *History of the Town of Ashfield Franklin County*, op. cit., p.266.
- (70) ditto.
- (71) Foster Sterns, “Letters from a freshman in the forties”, *Amherst Graduate Quarterly*, vol.19, Aug. 1930, p.245.
- (72) ditto.
- (73) Samuel Williston, *Life and Law*, Little, Brown and Company, 1940, p.5.
- (74) Robert S. Fletcher and Malcolm O. Young, *Amherst College Biographical Record of the Graduates and Non-Graduates*, The College, Amherst, Massachusetts, 1927, p.xvi.
- (75) Joseph Henry Sawyer, *A History of Williston Seminary*, the Trustees, 1917, p.64.

- (76) *Chronology of William Smith Clark's Associations with Williston Seminary*, The Williston Northampton School Archives 所蔵。
- (77) Joseph Henry Sawyer, op. cit., p.74.
- (78) ditto, p.68.
- (79) ditto.
- (80) ditto, p.71.
- (81) *Third Annual Catalogue of The Trustees, Teachers, and Student of Williston Seminary, Williston Seminary, Easthampton, Mass. For The Year Ending August 14, 1844*, Northampton, printed by John Metcalf, 1844, p.13, The Williston Northampton School Archives 所蔵。
- (82) ditto.
- (83) ditto, p.15.
- (84) クラーク書簡一八四四年十月六日付妹ハリエット宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (85) 同右。
- (86) *Catalogue of The Officers and Students of Amherst College, for the Academical year, 1844-45*, p.15, 1845-46, pp.14-15, 1846-47, pp.15-16, 1847-48, p.19.
- (87) クラーク書簡一八四五年十月十日付父宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (88) 同右。
- (89) クラーク書簡一八四四年十月二十六日付家族宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (90) W.S.Tyler, *History of Amherst College, During Its First Half Century(1821-1871)*, Bryan&Co., 1873, p.629.
- (91) ditto, p.628.
- (92) クラーク書簡一八四四年十月二十六日付家族宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (93) 同右。
- (94) Edward Hitchcock, *Reminiscences of Amherst College, Historical, Scientific, Biographical and Autobiographical ; also, and Wider Life Experiences*, Bridgman & Childs, 1863, p.291.
- (95) ditto, p.94.
- (96) クラーク書簡一八四七年十一月十五日付父宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。

- (97) クラーク書簡一八四四年十月六日付妹ハリエット宛、一八四五年九月二十四日付母宛、一八四六年十月九日付父宛、一八四七年十一月十五日付父宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (98) Edward Hitchcock, op. cit., p.153.
- (99) ditto, p.152.
- (100) ditto, p.155.
- (101) Typed copy of temperance pledge, Nov. 28, 1876, University of Massachusetts Archives 所蔵。
- (102) Edward Hitchcock, op. cit., p.164.
- (103) ditto, p.160.
- (104) ditto, pp.164-169.
- (105) ditto, pp.169-177.
- (106) クラーク書簡一八四六年三月十六日付母宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (107) 同右。
- (108) Joseph Henry Sawyer, op. cit., p.83.
- (109) クラーク書簡一八五〇年十一月二十八日付家族宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (110) 同右。
- (111) クラーク書簡一八五一年六月二十五日付父宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (112) クラーク書簡一八五一年三月七日付父宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (113) 同右。
- (114) 同右。
- (115) クラーク書簡一八五一年一月二十五日付父宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (116) 同右。
- (117) クラーク書簡一八五一年一月四日付妹サラ宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (118) クラーク書簡一八五一年三月七日付父宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (119) 同右。

- (120) Edward Hitchcock, op. cit., p.291.
- (121) W.S.Tyler, op. cit., p.327.
- (122) ditto.
- (123) *Catalogue of The Officers and Students of Amherst College, for the Academical year 1854-1855*, p.25.
- (124) W.S.Tyler, op. cit., p.422.
- (125) Edward Hitchcock, op. cit., p.291.
- (126) Rev. Edward Hitchcock, D.D., LL.D, *Address of Retiring from the Presidency*, p.47, Amherst College Archives 所蔵。
- (127) W.S.Tyler, op. cit., p.331.
- (128) ditto.
- (129) Rev. William A.Stearns, D.D., *Inaugural Address*, p.85, Amherst College Archives 所蔵。
- (130) ditto, pp.86-87.
- (131) ditto, pp.100-101.
- (132) ditto, p.91.
- (133) W.S.Tyler, op. cit., p.397, 400, 401.
- (134) ditto, p.421.
- (135) Edward Hitchcock, op. cit., p.73.
- (136) W.S.Tyler, op. cit., pp.421-422.
- (137) *Amherst College Moore Library of Chemistry*, 29 Oct. 1929, p.13, Amherst College Archives 所蔵。
- (138) *Amherst Graduate Quartely*, vol.19, Aug. 1930, pp.246-247, Amherst College Archives 所蔵。
- (139) *The College Signal, October 30th, 1907*, p.6, University of Massachusetts Archives 所蔵。
- (140) W.S.Tyler, op. cit., p.423.
- (141) Harold Whiting Cary, op. cit., p.36.
- (142) クラーク書簡 一八六二年十二月二十九日付父宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (143) ポストへ知事 John A.Andrew 書簡 一八六二年三月三十一日付クラーク宛 (P.C.Headley 『クラーク先生南北戦争従軍記』 一九六三

年、一一三頁所収。

- (144) クラーク書翰一八六三年四月二十一日付 Major Lewis Richmond 宛 University of Massachusetts Archives 所蔵。
- (145) Alfred Charles True, *A History of Agricultural Education in the United States 1785-1925*, Arno & The New Yorktimes, 1969, p.541.
- (146) Robert S. Fletcher, op. cit., p.131.
- (147) John W. Burgess, *Reminiscences of an American Scholar*, AMS Press, 1966, p.50.
- (148) ditto.
- (149) Alfred Charles True, op. cit., p.535.
- (150) *Fourth Annual Report of The Massachusetts Agricultural College*, Wright & Potter Printing Co., Feb. 1867, p.4.
- (151) *Third Annual Report of The Massachusetts Agricultural College*, Wright & Potter Printing Co., Jan. 1866, p.12.
- (152) *Fourth Annual Report*, p.4.
- (153) Edgar H. Libby, "Massachusetts Agricultural College", *Scribner's Monthly*, Vol.XII, No.6, Scribner & Co, Oct. 1876, pp.843-844.
- (154) William Smith Clark, "Professional education The President want of Agriculture", *Eighteenth of The annual report of The Secretary of the Massachusetts Board of Agriculture, with an appendix, containing reports of delegates appointed to visit the county exhibitions, and also returns of the finances of the agricultural societies for 1870*, Wright & Potter, State Printers, 1871, p.73.
- (155) *Fifth Annual Report of The Massachusetts Agricultural College*, Wright & Potter Printing Co., Jan. 1868, p.11.
- (156) ditto.
- (157) *Seventh Annual Report of The Massachusetts Agricultural College*, Wright & Potter Printing Co., Jan. 1870, p.37.
- (158) *Fifth Annual Report*, p.11, *Seventh Annual Report*, p.37.
- (159) *Seventh Annual Report*, pp.33-34.
- (160) ditto, p.14.
- (161) *Fifth Annual Report*, p.12.
- (162) L.B.Caswell, op. cit., p.15.
- (163) ditto.
- (164) *Fifth Annual Report*, p.12.

- (165) 開講直後に結成されたが正確な時期は不明である。
- (166) L.B.Caswell, op. cit., p.15.
- (167) ditto, pp.17-18.
- (168) Harold Whiting Cary, op. cit., pp.43-44.
- (169) L.B.Caswell, op. cit., p.16.
- (170) ditto, p.18.
- (171) *Eighth Annual Report of The Massachusetts Agricultural College*, Wright & Potter Printing Co., Jan. 1871, p.29.
- (172) ditto.
- (173) Henry W.Parker, "Report on The Department of Mental, Moral and Social Science", *Tenth Annual Report of The Massachusetts Agricultural College*, Wright & Potter Printing Co., Jan. 1873, p.39.
- (174) Harold Whiting Cary, op. cit., p.41.
- (175) ditto.
- (176) Calvin Stebbins, *Henry Hill Goodell The story of his life with letters and a few of his address*, The riverside Press, 1911, p.85.
- (177) L.B.Caswell, op. cit., p.14.
- (178) *Sixth Annual Report of The Massachusetts Agricultural College*, Wright & Potter Printing Co., Jan. 1869, p.5.
- (179) L.B.Caswell, op. cit., p.21.
- (180) ditto, pp.23-24.
- (181) ditto, p.23.
- (182) *Amherst Record*, 15 Nov. 1871.
- (183) *Amherst Record*, 23 June 1886. (マサチューセッツ農学院の卒業生との夕食会を語ったもの。)
- (184) *Twenty-fourth Annual Report of The Massachusetts Agricultural College*, Wright & Potter Printing Co., Feb. 1880, p.19.
- (185) D.P.Penhallow, *William Smith Clark : His place as a scientist and his relation to the development of scientific agriculture*, Reprinted from Science, N.S., Vol. XXVII., No.683, pp.172-180, Jan. 1908, p.4, University of Massachusetts Archives 所蔵。
- (186) Harold Whiting Cary, op. cit., p.40.

- (187) *Twenty-fourth Annual Report*, pp.18-19.
- (188) *Amherst Record*, 23 June, 1886.
- (189) *Twenty-fourth Annual Report*, p.18.
- (190) Harold Whiting Cary, op. cit., p.54.
- (191) ditto, pp.54-55.
- (192) William Smith Clark, "Professional Education The Present Want of Agriculture", op. cit., pp.82-83.
- (193) Harold Whiting Cary, op. cit., p.56.
- (194) John M.Maki, *William Smith Clark A Yankee in Hokkaido*, Hokkaido University Press, 1996, pp.183-186.
- (195) ditto, p.207.
- (196) 「開識社設立許可願」『北大百年史』札幌農学校史料(一)・二六四頁。
- (197) 「開識社記録 一」『北大百年史』札幌農学校史料(二)・きょうせい、一九八一年、六三二頁。
- (198) 同右。
- (199) 『北大百年史』通説、五三頁。
- (200) 同右 五一〜五三頁。
- (201) 同右 五三頁。
- (202) Masatake Oshima, "Reminiscences of Dr. W.S.Clark", *The Japan Christian Intelligencer*, Vol.1, No.2, 5 Ap. 1926, p.56.
- (203) ditto.
- (204) クラーク書簡一八七六年八月五日付義弟チャールズ大尉宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (205) クラーク書簡一八七六年十一月十九日付義弟チャールズ大尉宛、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- (206) 同右。
- (207) 同右。
- (208) 同右。
- (209) 『北大百年史』通説、一六頁。
- (210) 大島正健著、大島正満・大島智夫補正『クラーク先生とその弟子達』教文館、一九九三年、八三頁。

- (211) 高倉新一郎解題『復刻札幌農学校』北海道大学図書刊行会、一九七五年、一頁。
- (212) Masatake Oshima, op. cit., p.57.
- (213) ditto, p.58.
- (214) ditto.
- (215) ditto.
- (216) ditto.
- (217) 内田澁書簡一八七七年七月七日付クラーク宛(佐藤昌彦・大西直樹・関秀志訳編『クラークの手紙——札幌農学校生徒との往復書簡——』北海道出版企画センター、一九八六年、二三七頁所収)
- (218) Masatake Oshima, op. cit., p.58.
- (219) ditto.
- (220) ditto, p.57.
- (221) ditto, p.59.
- (222) Typed copy of temperance pledge, 28 Nov. 1876, University of Massachusetts Archives 所藏。
- (223) Masatake Oshima, op. cit., p.58.
- (224) ditto.
- (225) 大島前掲書 一〇五頁。
- (226) 同右。
- (227) 同右 一〇五―一〇六頁。
- (228) 同右 一〇七頁。
- (229) Covenant of Believers in Jesus, University of Massachusetts Archives 所藏。
- (230) “Address of President W.S.Clark, August 14, 1876.”(高倉新一郎前掲書所収)
- (231) クラーク書簡一八七六年八月五日付義弟チャール大尉宛、北海道大学附属図書館北方資料室所藏。
- (232) “Address of President W.S.Clark, August 14, 1876.”(高倉新一郎前掲書所収)

- (233) 内村鑑三「流竄録」『内村鑑三全集』三、岩波書店、一九八二年、八〇頁。
- (234) Inazo Nitobe, "The Imperial Agricultural College of Sapporo, Japan" 『新渡戸稲造全集』第三三卷、教文館、一九八七年、一一頁。

(同志社大学大学院文学研究科博士前期課程)

資料１ 札幌農学校のカリキュラム

一八六八年のカリキュラムは一八六七七年のカリキュラムとほぼ同じ内容となっている。しかし、一八六九年のカリキュラムにおいてより具体的なカリキュラム構成が見られるため、本論文では一八六七年と一八六九年のカリキュラムを取り上げた。

下線…全人教育関連科目 太字…クラークが導入した科目

u003cdiv data-bbox="112 209 869 869" data-label="Table">

	I1	II2	III3
	1875（明治8）年2月23日札幌農学校のカリキュラム案としてモデルとされた1873年のマサチューセッツ農科大学のカリキュラム日本語訳	1875（明治8）年8月10日マサチューセッツ農科大学のカリキュラムを踏襲して開拓使によって作成されたカリキュラム案	1876（明治9）年のクラークによって作成された札幌農学校のカリキュラム（英文より筆者訳）
1 学期 1 学期	化学用物理学、代数、英語、農学（アグリカルチュル）、画法（フレキハンドローキング）、体操注1、力工（マニユアルレーボル）注2	化学用物理学、代数、英語、農学（アグリカルチュル）、画法（フレキハンドローキング）、力工（マニユアルレーボル）、体操（ミリタレードリル）	対数を含む代数、化学物理学及び無機化学、英語、 <u>日本語</u> 、軍事教練（Military Drill）、農業実習（Manual Labor）
2 学期	無機性化学、幾何学、農学、英語、画法（フレイハンド）、体操	無機性化学、幾何学、農学、英語、画法（フレハンド）	幾何学及び解析幾何、有機化学及び実験化学、農学、英語、 <u>雄弁術（Elocution）</u> 、フリーハンド及び幾何学的製図、軍事教練、農業実習
3 学期	有機及実験化学、幾何学、農学、体操、力工	有機及実験化学、幾何学、農学、力工	
2 学期 1 学期	農用及分析化学（アグリカルチュラレンドアナレチカルケミストリー）、分析幾何学（アナレチカルゼオメトリー）、農学、体操、力工	農用及分析化学（アグリカルチュラレンドアナレチカルケミストリー）、分析幾何学（アナレチカルゼオメトリー）、農学、力工	農業化学及び分析化学、植物学、 <u>人体解剖学と人体生理学</u> 、英語、 <u>雄弁術</u> 、農学、軍事教練、農業実習
2 学期	分量分析、三角術、農学、体操	定量分析、三角術、農学	三角法及び測量術、定量分析化学、植物学、農学、 <u>英訳と日本語訳</u> 、数学的製図及び実測製図、軍事教練、農業実習
3 学期	動物学、測量、農学、英語、図画、体操、力工	動物学、測量、農学、英語、図画、力工	
3 学期 1 学期	重学（メカニックス）注3、マルケツトガーデニング、虫学（エントモロジー）、動物学（ゾーロン）、平準法（レウエリング）及図面、体操、力工	重学（メカニックス）、マルケツト、カー、テニク、虫学（エントモロジー）、動物学（ゾーロン）、平準法（レウエリング）及図面、力工	機械学、動物学、植物学、果実栽培、英語、 <u>日本語</u> 、軍事教練、農業実習〔適宜〕
2 学期	物理学、本草学、顕微鏡用法（マイクラスコピー）、図画、農法論（アグリカルチュラレデバート）、体操	物理学、本草学、顕微鏡用法（マイクラスコピー）、図画、 <u>農法論（アグリカルチュラレデバート）</u>	天文学及び地誌学、畜産学及び日常の農業、 <u>英文学の歴史</u> 、造園術、 <u>英語と日本語の作文と翻訳</u> 、軍事教練、機械製図及び地形製図
3 学期	天文学（アストロノミー）、本草学、トボグラフキカルサルウエーイニング、養畜及搾乳法（ストック、エンド、デヤレフアーミング）、体操、力工	天文学、本草学、トボグラフキカルサルウエーイニング、ストック、エント、デヤレフアーミング、力工	
4 学期 1 学期	本草学、獣医学、記簿法（ブックケーピング）、道路及鉄道、図画、体操、力工	本草学、獣医学、記簿法（ブックケーピング）、道路、図画、力工	物理学、獣医学及びその実習、地質学、簿記、 <u>即興討論</u> 、顕微鏡学、軍事教練
2 学期	育樹法、獣医学、図画、体操	育樹法、獣医学、図画	道路、鉄道及び 水力工学 、 精神科学（Mental science） 、 政治経済学 、 <u>独創演説（Original Declamations）</u> 、軍事教練
3 学期	獣医学、地質学、ランドスケープガーデニング、農業法（ルラルロー）、農業温習、体操	獣医学、地質学、ランドスケープガーデニング、ルラルロー、農業温習	

資料2 マサチューセッツ農科大学のカリキュラム^{注4}

下線…全人教育関連科目

	1866年のカリキュラム (チャドボーン学長)	1867年のカリキュラム (クラーク学長)	1869年のカリキュラム (クラーク学長)
1 学 年 1 学 期	代数、英語、人体解剖学、植物学、 <u>健康の保持と学問方法論の講義</u>	代数、人体解剖学、人体生理学、化学 物理学	人体解剖学、化学物理学、商業演算、 簿記の授業 農業に関する講義 物質と自然の財産と熱量、光力、電気 力の影響に関する講義 演説法 (Declamations)、正書法、書法 の指導 軍事教練 ・歩兵戦術 ・戦士部隊教練
2 学 期	幾何学、製図、 <u>フランス語</u> 、化学一般、 鉱物学	幾何学、 <u>フランス語</u> 、化学	化学、代数、 <u>フランス語</u> の授業 農業に関する講義 非金属元素に関する化学、化学哲学の 原理、最重要の金属と農業におけるそ の用法 演説法、声楽、英文法の指導 軍事教練 ・歩兵戦術 ・中部隊教練 ・武器操作
3 学 期	幾何学、製図、 <u>フランス語</u> 、動物学一 般、植物分析	幾何学、 <u>フランス語</u> 、植物学	代数、幾何学、 <u>フランス語</u> の筆記練習 の授業 農業に関する講義 有機化学の講義 分析化学の実験室での指導 演説法と朗読の指導 軍事教練 ・歩兵戦術 ・中部隊教練 ・大部隊教練
備 考	第1学年の学生は、農業関連の特別課 程から、少なくとも1つの講義を受け ることが許される。	衛生学、化学、植物学の講義 (通年) <u>正書法、演説法、英作文の練習 (通年)</u>	
2 学 年 1 学 期	三角法、測量術、求積法、農学、自然 地理学、応用化学、鉱物学	<u>ドイツ語</u> 、農学、商業演算、簿記	<u>ドイツ語</u> 、地質学、幾何学と円錐曲線 の授業 農業に関する講義 農業化学の講義 実践化学の実験室での指導 雄弁術 (Elocution) とフランス語の翻訳 の練習 軍事教練 ・歩兵戦術 ・銃剣操作 ・散兵としての義務の指導
2 学 期	分析幾何学、 <u>ドイツ語</u> 、歴史、農業運 営、簿記、農場会計、実験室演習	三角法、分析化学	<u>ドイツ語</u> の筆記練習、対数、平面三角 法、球体三角法、軌跡、面、体積の測 定の授業 農業に関する講義 定量分析と化学実験室における実践に 関する講義 <u>雄弁術と声楽の練習</u> 軍事教練 ・歩兵戦術 ・銃剣訓練

3 学 期	ドイツ語、比較解剖学、地質学一般、造園術、農業建築術 家畜の病気、土壌の物理的特質、排水法についての講義	求積法、測量術、分析化学、動物学、製図	動物学、実際の土地測量、製図、幾何学的製図に関する測量術の授業 農業に関する講義 家畜の病気、一般病理学、熱病と炎症とそれらの影響、鼻疽病と皮膚病、呼吸器と循環器の病気、消化器官の病気、泌尿器官と生殖器の病気、去勢、出産間近の動物を援助するための分娩とその法則、乳房や乳首の病気、神経組織の疾患、目の疾患、皮膚の疾患、足の疾患、蹄鉄の打ち方、創傷、潰瘍、捻挫、骨と関節の病気、脱臼と骨折についての講義 <u>朗読の練習と黒板に文章を書く練習</u> 軍事教練 ・歩兵戦術 ・散兵教練 ・大部隊教練 ・警備勤務 ・パレードと閱兵の隊列
備考	第2学年の学生は、農業関連の特別課程から、少なくとも1つの講義を受けることが許される。	比較解剖学、家畜の病気、有機化学、市場向け果園経営の講義（通年） 英作文、雄弁術の練習（通年）	
3 学 年 1 学 期	力学、工学、政治経済学、英文学、フランス文学、ドイツ文学、微積分（選択自由） 園芸学、有益な植物の歴史に関する講義	物理学、フランス語またはドイツ語、農業化学、製図	ドイツ語、固体と液体の仕組、自然地理学の授業 農業に関する講義 有害な昆虫と無害な昆虫についての講義 機械学の講義 実地の水準と地形製図に関する指導 <u>シェークスピアを朗読する練習</u> 軍事教練 ・砲兵戦術 ・小部隊訓練
2 学 期	工学、流体静力学、分析化学、実験室演習、林学、産業統計 磁気学、電気学の講義	物理学、 <u>修辞学</u> 、園芸学	空気と蒸気、音、光、熱、電気、修辞学、組織植物学の仕組 温室の建設と管理、温室での植物の栽培についての講義、空気と蒸気、音についての講義 フリーハンドの製図、遠近法、陰影の指導 <u>討論と声楽の練習</u> 軍事教練 ・大砲術と騎兵術 ・重砲術と砲術の指導
3 学 期	天文学、気候学、飼育や様々な種に特別言及する動物生理学と植物生理学、修辞学、実験室演習 昆虫学、養蜂などの講義	天文学、植物分類学、 <u>合衆国の歴史</u>	天文学、組織植物学、歴史の授業 乳牛と日常の農場経営に関する講義 牧畜業と家畜の繁殖についての講義 比較解剖学の講義 <u>討論の練習</u> 軍事教練 ・大砲術 ・部隊別教練 ・歩兵術 ・大部隊教練
備考	第3学年の生徒は、農業関連の特別課程から、少なくとも1つの講義を受ける特権を持つ。	物理学、鉱物学、ツル植物、果実、林木の栽培、有益な昆虫、有害な昆虫についての講義（通年） <u>英作文、討論の練習（通年）</u>	

4 学 年 1 学 期	知的哲学 (Intellectual Philosophy)、 <u>国</u> 家行政組織、経済地質学、鉱業 農業関連法の講義	知的哲学、 <u>歴史</u> 、自然地理学、	心理学、英語、農場の関する土木工学 の授業 英文学の授業 果物と花の耕作、新種を作り出す技術 についての講義 機械製図と建築製図、労働計画とその 内訳の指導 <u>独創的な演説の練習</u> 軍事教練 ・ 騎兵術、大砲術、歩兵術 ・ 歩兵術と大砲術の教練指導官と将校 としての義務 ・ 騎兵術の理論的指導と騎兵隊の組織 と利用
2 学 期	道徳哲学、論理学、 <u>美学</u> 、 <u>英文学</u> 建築学の講義	道徳哲学、政治地理学、マサチューセ ッツ州と合衆国の行政組織	心理学、 <u>政治学と経済学</u> 、軍事学の授 業 土地所有者の権利と義務を含む農業関 連法の講義 樹木栽培、燃料、木材、果実生産やそ の他の目的のための植林と木の世話につ いての講義 軍事の歴史、軍事法、法定闘争につ いての講義 <u>独創的な演説の練習</u> 軍事教練 ・ 騎兵術 ・ サーベル訓練
3 学 期	特別課題、復習	地質学、工学、政治経済学	造園術、気象学の授業と全体的な復習 農業植物学の講義 農業関連の事に特別言及する建築学の 講義 鉱物学と地質学の講義 <u>国家行政組織に関する講義</u> <u>独創的な演説の練習</u> 軍事教練 ・ 射撃練習 ・ 剣術 ・ 教練一般
備 考	4 年生は全課程の全ての講義に出席す る。	牧畜業、建築学、造園術、地質学、 <u>英 文学の講義</u> (通年) <u>独創的な演説、討論の練習</u> (通年)	
全 課 程 備 考	軍事戦術、 <u>全課程中の議論と小論文</u>	身体訓練、軍事戦術、農場や果実園で の様々な作業の練習	全課程を通じて、農場や果樹園で様々 な作業を実践する

1 「教頭以下教師雇入、諸規則学則並に器械購入伺」『北大百年史』札幌農学校史料 (一) 163～166頁。

2 「教頭以外二名の専門科教師雇入に付吉田公使へ依頼」同上177頁。

3 *First Annual Report of Sapporo Agricultural College*, 1877, Tokei: Published by Kaitakushi, pp. 45-47より筆者作成。

注1 体操の原語は Military Drill であり、筆者訳では軍事教練としている。

注2 力工の原語は Manual Labor であり、筆者訳では農業実習としている。

注3 重学の原語は Mechanics であり、筆者訳では機械学としている。

注4 *Fourth Annual Report of The Massachusetts Agricultural College*, pp. 6-7, *Fifth Annual Report of The Massachusetts Agricultural College*, p. 19, *Seventh Annual Report of The Massachusetts Agricultural College*, pp. 33-34より筆者作成。